連続公開シンポジウム

廿一世紀の東方学

第１回

東方学のフロンティア

京都大学人文科学研究所

2001年（平成13年）12月

-

廿一世紀の東方学

東方学のフロンティア

京都大学人文科学研究所

2001年（平成13年）12月

は　し　が　き

連続シンポジウム「21世紀の東方学」の第1回「東方学のフロンティア」が去る10月13日午後京大会館で開催された。学内外の約120名にのぼる多数のかたがたの参加を得て盛会であったことは、「21世紀の東方学」のありかたについての関心の高さを物語るものであろう。われわれがなぜ今このシンポジウムを開催しようとするのか、また何を目指しているのかについては趣意書に詳しいが、東方学がいま大きな曲り角にさしかかっていることだけは確かである。

東方学とは何かと正面切って問われると、恐らくその答は人さまざまであろう。われわれが東方学にとりあえず託そうとしているのは、中国を主要な対象としつつも、その周辺にあって直接間接の交渉を有してきた地域をも含めて、その歴史、社会、制度、文化、相互交渉等を研究する人文社会科学の1分野というほどの意味である。ただし、情報化時代に適応した漢字情報処理や交換のためのシステムをその特性に即して構築し、欧米依存ではない新たな情報処理の枠組を提示していくことも、東方学が担うべき新たな課題であると考えている。とはいえ、中国学でもなく東洋学でもなく東アジア学でもなく、あえて「東方学」を標傍することの意味については、このシンポジウムを通じてより一層議論を深める必要があろう。

この連続シンポジウムは都合3回が予定されている。第2回は、12月15日に「東方学と国際協力」、第3回は2002年3月16日に「東方学の再構築」をテーマに、今回同様それぞれ4人のパネリストを迎えて開かれる。第1回にも増して多くのかたがたのご参加を得て、「21世紀の東方学」について幅広い観点から議論を深め、何らかの新しい展望を切り開いて具体的な提言にまとめることができれば、このシンポジウムを企画したものの一人としては望外の喜びである。

最後に、われわれのこの企画に対して当初から深い理解を示され、シンポジウム開催のための諸費用を総長裁量経費から割いてくださった長尾真総長をはじめとする京大当局の関係者に対して、心からの感謝の意を表したい。また、発表を快諾されたパネラーおよびコメンテーター諸氏、煩雑な準備作業や事務処理ならびに報告書の作成に当たられた人文科学研究所の教職員各位に厚くお礼申しあげる。

2001年11月5日

人文科学研究所教授　麥 谷 邦 夫

目　　次

はしがき　　人文科学研究所教授　　麥谷邦夫 …… i

連続公開シンポジウム「21世紀の東方学」趣意書…… I - 1
第１回「東方学のフロンティア」にさいして…… I - 2

プログラム…… I - 4

趣旨説明　　人文科学研究所所長　　桒山正進 …… I - 5
開会挨拶　　京都大学副学長　　尾池和夫 …… I - 8

報告1　欧米における近年の東洋学の動向　　シルヴィオ・ヴィータ …… I - 11
コメント：　高田時雄

報告2　フィールドワークと歴史研究　　森　正夫 …… I - 17
コメント：　小南一郎

報告3　中国における現代史研究の意義　　楊　天石 …… I - 31
コメント：　狭間直樹

報告4　古典文献と漢字情報学　　佐藤敬幸 …… I - 38
コメント：　安岡孝一

まとめ　　東方学研究部主任　　森　時彦 …… I - 47
閉会挨拶　　桒山正進 …… I - 48

連 続 公 開 シ ン ポ ジ ウ ム「２１世 紀 の 東 方 学 」趣 意 書

21世紀を迎えた今日、高度の進歩を遂げた科学技術を基盤として、政治、社会、文化のあらゆる面でグローバル化が進行しつつある中、従来の学問研究のあり方も大きな質的変化を求められている。国境を越えて地球規模で変動する世界情勢を的確に把握するためには、これまでの殻をうち破る複合的かつ総合的な視野からのアプローチが不可欠である。また、IT 技術の発達によって情報形態そのものが大きく変化しつつある現在、それに適応した教育研究システムの構築も緊急の課題となっている。

日本における東方学は、長い伝統と高い水準を誇ってきた。とりわけ20世紀の京都では、文献の基礎的研究を機軸とする共同研究が盛んとなり、すぐれた成果を数多く生み出してきた。その考究対象となった地域は、日本、韓国等の中国文化の影響を受けた国々やシルクロード等の交易ルートによって結ばれたインド、イスラム、西域諸国にも及んでおり、中国を中心とする東方世界の総合的研究である「東方学」と呼ぶにふさわしい広がりと深みを有するものであった。

京都における研究スタイルは、伝統的に古典研究、歴史研究を重視してきたが、それは過去の世界に閉じこめられた対象としてのみ、古典の存在を考えてきたわけではない。文明の起源と史的変遷の過程を照射することで、現代に至る文化の生成をダイナミックに洞察しようとするものであった。しかしながら、西欧近代の科学文明が全世界にくまなく波及し、各地域に固有の社会と文化を欧米型に一変させてしまった20世紀後半から現在において、伝統社会からの乖離の一面だけが強く認識されるようになった結果、非実利的な学問は、複雑化した現実社会との接点を失いはじめている。しかも一方では、先端技術の開発と社会への応用が加速度的に進行し、生命倫理や環境破壊等、地球規模の大問題が浮上してくるとともに、社会全体が既存の価値観では解決しえない深刻な悩みの淵に陥ろうとしている。

このような事態を打開するという現実的要請に応えていこうとするならば、21世紀の人文学は、従来の枠組み、すなわち哲学、文学、歴史学、あるいは経済学、政治学、法律学といったカテゴリーから抜け出て、より有機的に連関した教育研究システムをめざす方向で動き出す必要があるだろう。それは、たんに組織の再編成のみを意味するのではなく、学問の構造的な変革と新しい方法の導入によって、文化の総体を捉えようとするものでなくてはならない。

また、冷戦構造の終結を契機として経済大国への道を歩みはじめようとしている現代の中国は、これまで日本がリードしてきた東方世界に大きな影響力を発揮する存在となってきた。わが国において、現代中国に対する正しい認識のもとに、社会的、文化的な交流を緊密に行うことは、欠くべからざる営為であり、きわめて緊要な課題となっている。そこにおいて、日中両国の相互理解をより深め、東アジア諸地域の安定に貢献して

いくためには、現時点における構造や動向を注視するだけでは十分とは言えない。その基底にある文化伝統に対する透徹した認識をともなってこそ、はじめて現代中国の動態構造を深く理解することが可能となるのである。

そうした見地から振り返る時、これまで蓄積してきた東方学の研究成果は、もちろん有益な情報を多数含んではいる。しかし、それが個別の分野での議論に止まっている限りは、近代と前近代を断絶させている厚い壁に阻まれて、中国文化の再認識、再評価への途は閉されてしまうことであろう。したがって、これまでの古典研究、歴史研究は、それらが対象としてきたものを、時代、分野を超えて包括的に考究する基礎研究に統合されると同時に、さらに客観的な歴史認識のもとにグローバルな視野から展開される現代中国の総合的研究が、その基礎研究と相補的な関係で構想されることが望まれる。

以上のような情況を考慮すれば、今こそ21世紀の東方学がどのような学問に発展していくべきかについて、十分な討議を重ねるべき時期にきているように思われる。そこで、全3回の連続シンポジウムを企画し、様々な角度から現時点における諸問題を深く掘り下げて議論し、今後の方向性を模索することにしたい。

第１回「東方学のフロンティア」にさいして

21世紀を迎えた今日、冷戦構造の終結と経済活動や情報伝達のグローバル化は新たな問題を生みだしつつある。イデオロギーや政治・経済的利害の対立を軸とした問題がその比重を減じ、急速な発展をとげつつある科学技術と人間の倫理の間、またグローバルな基準にもとづく多国籍企業の利潤追求と地域の生活の間などに生じる摩擦やきしみが注目されるようになった。国境を超えた地域の統合が進みつつある中で、21世紀には「文明間の衝突」が顕在化するという予測もある。政治体制や国民経済といった表層の構造にのみ着目するアプローチによってこうした問題を理解することは、もはや不可能と言わねばならない。それぞれの社会の伝統に根ざす文化価値、さらには集団的記憶としての歴史は、人々の思考と行動を規定する要因としてきわめて重要である。こうした文化諸領域の研究が、今後ますます重要性を増すであろうことは間違いない。

しかし、こうした文化価値や歴史もけっして固定したものではない。現代の世界規模の情報伝達や人やモノの移動は、それらをつねに変化させ再編する。文化諸領域をこのように時間軸と空間軸のなかのダイナミックな生成の過程として取り扱う新たな学問方法が求められているのである。京都の東方学が伝統的に古典研究を重視してきたことは確かである。しかし、古典は過去の世界に閉じこめられた対象として存在するのではな

い。これを現代社会の基底にある文化伝統として位置づけ、また文化伝統がつねに現代の立場から再解釈され、取捨選択のうえ動員されるものであることに着目するならば、これまで蓄積されてきた東方学の方法とその成果は、現在求められている新たな学問方法の立脚点の一つとして重要な位置を占めることとなろう。古典に立脚しながら、しかも典籍だけにとらわれぬ、同時代的かつ動態的な東方学とでも言うべき視点が求められているわけである。

文化諸領域の研究にとって典籍や文書が根幹をなす資料であることは、今日においても変わりない。しかし、大規模かつ組織的な資料の電子化が進み、情報伝達の方法も多様化しつつあるなか、新たな東方学はその技法においても、取り扱う対象においても大きく変容していくことが予想される。我々のめざす新たな東方学のなかで、漢字情報学は技術的な基盤を提供するのみならず、情報化時代の文化の受容や伝播、変容の過程を研究するものとして位置づけられるであろう。

このたびのシンポジウム「東方学のフロンティア」では、まず、先駆者として新たな方法と対象を模索し大きな成果をあげてこられた4名の方々から、その研究経過の一端をご紹介いただくとともに、その経験にもとづきながら21世紀の新しい東方学の構築にむけたご提言をいただく。ついで、これらの報告をふまえて参会者による討論をおこない、東方学の新たな展開の可能性を追求する議論の場としたい。

プ　ロ　グ　ラ　ム

連続公開シンポジウム「２１世紀の東方学」

第１回　「東方学のフロンティア」

主催　京都大学人文科学研究所

日時　１０月１３日（土）　１３時～１６時
場所　京大会館　１０１室

開会の辞　　桑山正進（人文科学研究所所長）

副学長挨拶　　尾池和夫（理学研究科教授）

司会　　森　時彦（人文科学研究所教授）

パネリスト	コメンテーター
シルヴィオ ヴィータ（ナポリ東洋大学教授／イタリア国立東方学研究所所長） **「欧米における近年の東洋学の動向」**	高田時雄（人文科学研究所教授）
森　正夫（愛知県立大学学長） **「フィールドワークと歴史研究」**	小南一郎（人文科学研究所教授）
楊　天石（中国社会科学院近代史研究所所員／中国中央文史研究館館員） **「中国における現代史研究の意義」**	狭間直樹（京都大学名誉教授）
佐藤敬幸（国際情報化協力センター国際情報化研究所主任研究員） **「古典文献と漢字情報学」**	安岡孝一（人文科学研究所助教授）

趣　旨　説　明

人文科学研究所所長　桒山正進

司会（森時彦）　それでは，ただいまより京都大学人文科学研究所の主催によります連続公開シンポジウム「21世紀の東方学」，その第１回目に当たります「東方学のフロンティア」というテーマのシンポジウムを開会させていただきます。

本日は，土曜日の午後にもかかわらず，多数ご参会くださいまして，まことにありがとうございます。

最初に，人文科学研究所の桒山正進所長より，この連続公開シンポジウムを企画いたしました趣旨につきまして説明させていただきます。

桒山　本日は，ウィークエンドにかかわりませず，多数の方々に御来会いただきまして，大変ありがたく思っております。

この連続シンポジウム「21世紀の東方学」の第１回「東方学のフロンティア」を開催するに当たり，一言，所長といたしまして御挨拶申し上げます。

京都大学の東方学，あるいは日本の東方学と言い換えてもいいかもしれませんが，この100年に近い歴史を通して，輝かしい成果とともに歩んでまいりました。それは，日本が世界に貢献することのできる，いわば数少ない人文学の領域であるというふうに思っております。

戦前京都大学に留学いたしましたエドウィン・ライシャワー博士は，「東洋学において京都は世界のメッカ，中心であり，我々はこの分野に関しては勧告すべきなにものもない」と戦後に述べまして，京都大学の東洋学ないし東方学に高い評価を与えていただきました。この言葉に示されましたとおり，我々は数多くの記念すべき業績を上げてまいりまして，世界の主導的な立場，有効な役割を果たしてきたということに，皆様，御異論ないことと思います。この伝統は，思弁を排し，実証的な方法で研究する，そうして主として古典の研究を行うということで，今日に至るまで脈々と受け継がれてまいりました。知識の領域がさまざまに細分化されました現在という時代においても，まだなお，優れた光を放っていると確信している次第であります。

しかしながら一方，東方学は，古典に立脚したこれまでの研究体系や研究姿勢に加えまして，同時代的かつ動的なアプローチをここにおいて加えることにより，さらに一層の発

展をするための基盤を築くことができるはずであります。実はライシャワー博士の勧告の後，つまり第２次大戦後において，世界の東方学は少しずつ，それ以前とは様相を異にしてまいりました。特に合衆国で，中国学を中心とする東洋学が非常に大きく発展いたしましたことは，皆様ご存じのとおりでありますし，中国におきましても，自国の学問は非常に大きく，また層の厚い展開を遂げてまいりましたこと，御承知のとおりであります。また現在，中国をはじめとするアジアの諸国は，経済的，文化的，社会的に著しい発展を遂げました。特にこの30年間ほどの間に至ってこのような様相が非常に大きくなってまいりました。東方学を取り巻く時代と環境というものは，ことごとに，半世紀，あるいはそれ以前と大きく変化しつつあります。欧米の方法というものに偏りがちであった世界の東方学の構図は，今，大きく変化している時であり，変化の波が本当に我々に迫っていることに気づくべきであると思います。

このような環境の中において日本の東方学，ひいては京都大学の東方学がいかにあるべきか，今や独自性，方向性というものが求められているといえましょう。そういうことをいま考えるということすら，既に遅きに失したと見ても，また過言でないかもしれません。東方学の見直し，あるいは基盤整備を本格的にやる時期に我々は来ているというふうに思います。

21世紀を迎えました今，そういった従前の業績の上に立って，なお新たな地平を切り開いていくとすれば，どのような方向を指向すればよいのか。本シンポジウムは，今後必要とされる東方学の新しい地平を切り開き，日本における新しい東方学の構築を追求せんとして企画したものであります。

長尾総長も，京都大学の東方学を高く評価されておりまして，このたびのシンポジウムには大変大きな期待を寄せられております。京都大学をはじめ，京都には，アジアを研究対象とする研究者が極めて多くおられます。わけても，京都大学には東方学の分野の研究者が集中していることは，よく知られております。京都の地理条件のおかげと申しますか，研究のためにはいろいろな集会がしばしば開かれております。しかしながら，研究者が一体となって東方学の将来像を構想する，構築する機会は，不思議やいままでまったくなかった。京都大学の中においても，そういう機会はなかったのでございます。今回のシンポジウムは，京都大学をはじめとする東方学の関係の研究者に呼びかけて開く初めての試みということになります。これが日本，さらには世界の今後の東方学の発展に大きなインパクトを与える機会になることを，心から願う次第です。

近年，東方学の分野で大きな成果を上げてこられました内外の研究者をお招きいたしまして，これから３回のシンポジウムを行っていくつもりです。今回の「東方学のフロンティア」を第１回といたしまして，この討論を踏まえて，第２回シンポジウム，そして第３回というふうにつなげていきたいと思います。東方学の新たな展開を追求する議論の場といたしたいと思います。

シンポジウムの成果は，記録して公開をいたします。できれば，東方学の世界的なセンターであるいくつかのアメリカ，中国，フランス，その他の研究所におられる指導的な立場の研究者を対象にレビューを実施したいとも考えております。今日の日本の，京都の，東方学に対する評価，展望などをお聞きし，御出席の皆様より頂戴する忌憚ない御意見と御協力ともども，今後の糧といたしたく存じます。

なお最後になりましたが，京都大学長尾総長は，学長裁量経費を割裁して，このシンポジウムに多分の御支持をくださいました。この場を借りまして厚く御礼申し上げます。

これを以て，簡単ではございますが，私の挨拶とさせていただきます。本日はどうぞよろしくお願いいたします。失礼いたしました。（拍手）

司会　ありがとうございました。

開　会　挨　拶

京都大学副学長　尾池和夫

司会　引き続きまして，京都大学を代表して，副学長の尾池和夫先生よりご挨拶を賜ります。

尾池先生は，ご存じのように，地震学の大家であられますが，京都日中学術交流懇談会という民間団体で，中国との学術交流を推進するためにつくられた団体でありますが，その会合の席で，唐山地震の前後だったと思いますけれども，中国の地震予知の体制についてお話をうかがって，私，いたく感動したことがございます。また，人文研の教授であられた小野和子先生からお聞きした話として，阪神大震災の時に，第１波の揺れでがばっと起きられて，これは神戸か名古屋が震源だと言下に言われたというエピソードもうかがっております。

この第１回目のシンポジウムで，東方学がどういう方向に向かうのか，予知していただければありがたいと思います。どうぞよろしくお願いいたします。

尾池　どうも少し風変りなご紹介をいただきました尾池でございます。地震の話はともかくとして，一言ご挨拶を申し上げます。

京都大学の人文科学研究所の主催で，「21世紀の東方学」という連続シンポジウムが３回にわたって開催されるということになりました。この連続公開シンポジウムの開幕に当たりまして，ご紹介いただきましたように，京都大学を代表してご挨拶を申し上げたいと思います。

長尾真総長は，本当にこのシンポジウムに大きく期待を持っておりまして，出席して学習もしたいと大変楽しみにしていたのでありますが，ちょうどハーバード大学の総長の就任式に呼ばれてしまいました。しまいましたなんて言ってはいけないんですが。混乱の最中ではありますけれども，あえてやっぱり出席したほうがよかろうということで，出張するということに決められました。私に，原稿を渡すから，読んでも読まなくても，参考にして適当に挨拶を自分でやってこいと，こういうご指示をいただきまして，急遽私が参じたわけでございます。というわけですから，原稿はここにあるんですけれども，半分代読ということにさせていただきたいと思います。

人文科学研究所，桒山先生のお話にも

ありましたように，日本のこの分野の研究は100年の歴史とおっしゃいましたが，京都大学の研究所，その前身の１つであります東方文化学院京都研究所，それからそれを引き継いだ東方文化研究所，その流れをずっとたどりますと，80年近くの歴史があるというふうにうかがっております。中国古典学の分野で，数多くの世界的な業績を上げてこられました。これは，中国の優れた文化に対する敬意をモチーフとしながら，しかも厳格な文献実証主義の方法論に支えられた学問研究の積み重ねであったと言えると思います。今日，東洋学のジャンルで「世界の人文研」という名声をよく耳にいたしますが，このような実績が正当に評価された結果であろうと思われるわけでございます。

東方文化研究所というのは，北白川小倉町のところでスパニッシュ・ロマネスク様式といわれる白い建物で知られておりまして，私も学生のころ，北白川に下宿しておりまして，毎日のようにその横を通りました。地域の方々にも大変親しまれている建物でございます。

人文科学研究所は，2000年４月だったと思いますが，全面的に大きな改組をされまして，２つの研究部を中心に研究をするという組織になりました。その中核であり，また大きな特色であると思いますが，共同研究と呼ばれる方式で研究を進めていく。それが非常にやりやすい形に整備されたのだと思います。この２つの研究部のうちの１つが，東方学研究部というところであります。

21世紀を迎えた今ですが，中国，韓国をはじめアジア諸国が，著しい経済的，文化的発展を遂げつつあります。これに伴って，世界の東洋学の構図も大きく変わり始めているようであります。中国では，自国の文化や学問の伝統をさらに発展させるべく，国立アカデミーとして設立された研究所及び各有力大学において，大規模な研究プロジェクトや文献の整理・出版，そしてコンピューターによるデータベースの作成などが推進されまして，すでに大きな成果を生み出していると聞きます。

欧米対ソ連・中国という東西対立の冷戦時代が過去のものとなりまして，今や物・情報の行き来が格段に自由となった今日では，欧米の東洋学も，過去の偏りを脱却して，より幅の広い，かつ精力的な研究が行われるようになりました。例えば現地における長期のフィールドワーク，新たな文書資料の獲得を通じて，欧米の研究者が東洋学において優れた先駆的な研究成果を上げることも珍しくないというふうにうかがいます。

この連続シンポジウムですが，このような世紀の変わり目における世界の状況を前にして，輝かしい伝統と蓄積を誇ってきました日本の東洋学が，今までのように安閑とはしておられない，従来の領域を超えて東洋学の新たなフロンティアを切り開いていくため，そういう趣旨で企画されたものと思います。桒山先生からの詳しいご説明，趣旨も，改めて今うかがいました。

本日は，その第１回であります。「東方学のフロンティア」という初回を飾るにふさわしいテーマだと思いますが，国の内外から４人の著名な専門家をお招きして講演をしていただくということになりました。イタリアからはシルヴィオ・ヴィータ先生，中国からは楊天石先生，ちょうど京都にお越しのこのお２人の先生から，欧米や中国における東方学

の最前線について興味深いお話が拝聴できるものと期待しております。

私も，ちょっと途中で失礼をいたしますけれども，学習を深めさせていただきたいと，楽しみにしてまいりました。

それから，森正夫先生ですが，中国本国の研究機関との協力に基づくフィールドワークのご経験，貴重なお話をしていただけるものと思っております。それから，情報学の分野から，佐藤敬幸先生。古典文献をコンピューターの利用によって処理するという問題について，最新のお話を披露してくださるそうであります。

今日は，このように多方面にわたる専門の先生方から，大変バラエティーに富んだご報告，ご提言をいただくということで，21世紀における東方学の新しい領域を模索しようとする貴重な機会になると思います。参会された皆様方に活発な議論をお願いしたいと思います。

ご講演くださる先生方，コメンテーターの先生方，それからこのシンポジウムに参加してくださいました方々に深く感謝いたしまして，私のご挨拶ということにさせていただきます。どうもありがとうございました。（拍手）

司会　懇切なお言葉をありがとうございました。

欧米における近年の東洋学の動向

ナポリ東洋大学教授／イタリア国立東方学研究所所長　シルヴィオ・ヴィータ

司会　それでは，ただいまよりパネラーによる講演に入ります。

最初は，イタリアのシルヴィオ・ヴィータ先生にお願いいたします。

先生は，ナポリ東洋大学の教授をしておられると同時に，イタリア国立東方学研究所の所長の重職も担っておられます。ご専門は唐代の宗教史で，主として石刻資料などを用いて仏教史の研究に大きな業績を上げておられます。最近では，イタリアと中国との政府間協定に基づいて，洛陽の遺跡を発掘調査する仕事で主導的な役割を果たしておられます。

また先生は，若いころから，日本，台湾，アメリカなどに長く留学されまして，いわば世界の東洋学の現状について非常に深い認識をお持ちだと聞いております。本日は，その方面のお話をおうかがいできるものと思います。

では，ヴィータ先生，よろしくお願いいたします。

ヴィータ　紹介いただきましたヴィータです。

本日のテーマとはある意味で関係もあると思われますので，まず私が仕事をしているイタリア東方学研究所について，簡単な形でちょっと触れておきたいと思います。

すでにご存じの方がたくさんいらっしゃると思いますが，我々は84年以来，京都の東一条というところに所在しまして，イタリア政府の機関として活動してきました。研究所の名称には東方学という日本語名を East Asia Studies の訳語として使っていますけれども，結局のところは，中国を中心とする，現代及び古代の東アジア研究に携わるイタリアとイタリア以外の国の学者のために開放しています。人文科学的色彩が濃く，すべての研究成果は研究所の出版物に発表されるという仕組みになっていますが，設立以来，日本全国，そして特に京都にある大学及び研究機関と密接な関係を持ちながら，さまざまな国の研究者が集まる場となりました。

研究者と認める者はだれでも使用できる小さな閲覧室も設けておりまして，そこは，京都の多くの図書館の蔵書を考慮した上で，外国人学者のニーズに合ったものを集める方針です。つまり，こういう意味でも，孤立した立場を守るよりも，ネットワーク意識のもとで日本と京都に位置づけようとしているところです。

最近のヨーロッパの学術的動向も反映していますが，同じくフランスの施設で

あるフランス国立極東学院（EFEO）京都支部，つまりよく知られている法宝義林研究所が，去年６月から同じビルの３階に移り，正式の協定のもとで，これから力を合わせて活動することになりました。我々の願望としては，京都でヨーロッパ諸国の大きな研究成果の中核となれればいいなと，ささやかに思っているわけです。

こういう話はとりあえずさて置いて，欧米の東洋学の動向という問題に関して少し話をさせていただきます。ただ，時間の制約もありまして，私個人の知識の限界もありますから，あくまでも知っている範囲ということになってしまうんです。それで，具体的な研究プロジェクトやリサーチのテーマというよりも，大まかな学問の概念のことを，まず東洋学の概念と近年の動向，中国学との関係，そしてヨーロッパの事情を中心とする過去と現在，教育及び研究施設の制度的な側面も含めて話したいと思います。

まず，「東洋学」という言葉なんですが，これは，幸か不幸か，私個人的には不幸だと思いますが，従来どおり平気に使えない時代になってしまいました。もちろん意味内容は日本と欧米では違いますが，そのことについては後で言及することにしまして，基本的にはオリエンタル・スタディーズ，もしくはサイード以来悪名高くなっているオリエンタリズムという言葉の置き換えとして，とりあえず使わせていただきます。中国研究も，従来，東洋学という大きな枠組みの１コマとして伝統的に位置づけられているからです。

２，30年前から，「東洋」という概念は，エスノセントリック，ヨーロッパ中心主義，西洋中心主義だという指摘があり，特にアメリカではそれを避けようとして，学科あるいはいろいろな学術雑誌の名前から消えてしまいました。ですが，それを使うと，恐ろしい罪を犯した怪物のように扱われるのは，確かに最近のことです。

サイード及びその後継者たちの業績と学風に由来するものでありまして，その要点は，「東洋」というものがヨーロッパで形成された概念であり，そしてそれは東洋の諸民族を迫害するために使った政治的な武器であったというわけです。植民地政策を正当化するのに学術的に理論づける役割を果たしたわけで，東洋学者はその植民地政策の共犯者に過ぎなかったという議論なんですが，サイード以来のこういう考え方の妥当性について，私は何も話をするつもりも余裕もないんですが，私の見るところでは，最近の研究動向に２つの意味でこういう考えが影響していると思います。

１つは，過去の学者の業績をより批判的に意識することです。特に，その研究を時代の精神史の背景の中で考えることが大事なことだという意識が高まり，学説史を読み直す効果となる。もちろん場合によって，学説史一辺倒という印象を与えかねませんが，こういう面ではよい刺激となったんじゃないかと思います。とはいえ，その反面，先ほども申し上げたように，ヒステリックとも言うべき態度で学説史を単純な善と悪との闘いの場と見て，魔女狩りというよりも東洋学者狩りという現象まで目立ちます。

ある学者の業績に，オリエンタリズムというラベルを貼り，学説的な価値を問うよりも道徳観念が働いて，悪ということになると，その人のすべての著作を読む価値がないということにさえなってしまいかねません。そうなると，かえって学問研究の過去の歴史の理

解を妨げるのではないかという気もします。

ですから，今現在，ヨーロッパ的な意味での東洋研究の妥当性を考える際，こういういわばイデオロギー的な批判をまず念頭に入れるべきだと思うんですが，ただ，それと同時に，もう１つの意味で東洋学，むかし東洋学の専門領域だとされていた各地域の学問ですね，中国学，インド学などの存在意義が問われているのも，現状ですね。その学術的価値，要するに学科，科学として成立するかどうか，地域研究が科学的な学問であるかどうかという論議ですね。特に目新しいものではありませんが，中国研究は特に批判の的となっているようです。

ただ，東洋学科というものが教育の枠組みとして今でも必要であり，すべての基本的な道具を与える環境でもあります。そして，それぞれの分野の専門家は，その分野の専門家としても両方のつながりと専門知識を持つことは当然の話で，その研究の成果において，その分野に共通する１つの言語らしきものを使えないと，会話が成立しないのは確かです。要するに，中国経済をやっている人は，まず経済学者である。中国言語学をやっている人は言語学者であるということです。中国文学をやっている人だったら文学研究家であるといった考えですが，それぞれの学問の基本問題と方法論を身につける必要性があるということですね。経済学，言語学の専門知識，文学理論などは１つの言語であり，そういう意味で，その研究の科学性の証でもあるわけです。

最近，オランダの学者が，Is Sinology a science？と問いかけて，ヨーロッパ主義の伝統的な中国研究の形態を視野に入れた上で，科学としての関心を疑うという論説がありました。ただし，先ほど申し上げた枠組みなしで中国の経済を専門とする経済学者は育たないでしょうし，その人が批判の対象としている中国研究者は，ヨーロッパを含めて世界のどこにも存在しないような気もしなくはありません。

この２つの違う立場からの批判にヨーロッパの学会がどう答えて，どう動いているか，見るべきところはあると思います。ヨーロッパの事情はどうであるかを見ると，確かに，この２つの議論を意識しながら再編成に進んでいると言えるかもしれません。ただし，過渡期とはいえ，従来の学問の形態が根強く残り，よい意味でそこに学問のスタイルの独自性が見い出されるかもしれません。私は，その独自性は，どちらかと言いますと古典学の伝統に根強く影響されていることにあると思います。これは，まずヨーロッパの思想史・精神史の中で，特に近代世界にとって，他者のイメージと言いますか，自分のところから見て違う世界というのを古代ギリシャと中国に求めたものだと思います。広い意味で，時間的，つまり時代的に遠いところはギリシャであり，空間的に，つまり地理的に遠いところは中国であった。こういう意識のもとで，場合によって潜在的なものですが，それぞれの学問が成立したんじゃないかと思います。

すでに姿が消えている文化を理解するには，古典を読むしか道がないという意識なんですが，これは西洋の古代に対する学問の姿勢です。文献を読む技術を身につけることが先決問題になるわけです。それで，中国というものは，過去にあっただけじゃなくて，現実

の世界にも存在しているにもかかわらず，西洋の古典学の延長線上に狭い意味の東洋学，つまり中国学が成立することになります。そして，中国学科は，まず古典文献を読む場となったわけです。

英語で言いますと Classical Studies も，１つの概念として，そして１つの枠組みとして考えられてきましたし，今でも生きています。科学的じゃないという疑問を投げる人はいないでしょう。むしろ，Philology たるものは，科学的精神，批判精神の根底にあると思われることが多いと思います。そういう意味では，古代西洋文明を研究の対象とする言語学者でも，経済学者でも，Classical Studies の枠組みとしての有効性を問うことはありません。こういうことで，さっき申し上げた議論を考慮しながらも，中国学がそういう形態を保つのは，それなりの意味があるでしょう。

では，どこにこういう伝統が残っているかと言いますと，ドイツの事情は深く知りませんのでさて置いても，フランス，イタリア，イギリスの場合は，言語を習得することは中国研究及び一般的な東洋学専攻のカリキュラムの中心となり，この点ではイギリスの SOAS（School of Oriental and African Studies）は１つの典型的な例だと思います。

それぞれの学科では，それぞれのテキストを読む訓練ということが中心となります。依然として，東洋学科もしくは日本研究科，中国研究科というものがありまして，そこで場合によって２つのジェネレーションの学者が今でも共存しているのが現状で，サイノロジストということになると，昔みたいに中国に関するすべての知識を備え持つ人もいないことはないし，社会も，ある意味では今なおそういうことを要請しているようです。

ただし，昔からあったところを除いて，新学科という話になると，明らかに違った形態をとるところもあります。そういうところは，歴史の先生が歴史学科に籍を置いたりすることは多くなってきていますし，フランスの CNRS が地域的な分類を完全に廃止したことも，そういう動向を示すもう１つの象徴的な出来事であると私は思います。

そしてまた，最後になりますけれども，ヨーロッパ風の学問体制の特徴について，もう１つ指摘し得るところがあると思います。これは研究の対象となる地域との関係です。そういった面では，ヨーロッパとアメリカの違いがちょっと目立つように思われます。ヨーロッパ諸国が現地にベースを持つのは，単なるランゲージセンター，言語の訓練養成校みたいなものではなく，実際に研究を行う場所として機能する施設をつくることが多いのです。

フランス，イタリア，ドイツが海外の施設を持つことは，これもある意味では古典学の伝統が関係しないことはないのですが，特に考古学の分野では，古代オリエント，古代ギリシャ・ローマの研究所が昔からありました。そこに交代で研究者が滞在し，若い人々が，長い間現地に住んでいる人の指導を受けて研究するスタイルになっているわけです。そこには植民地時代の影響もないではありませんが，昔からあるものの重要性が現代的な意味で問い直されているのは明らかです。

初めに申し上げたイタリアとフランスの動きがそれであり，私自身，そういう場所の存

在を考慮しながら，全世界的な中国研究のネットワークをつくる必要があると思っております。その国の学者との交流は，日常生活に根を下ろしたものになり，同時に，単純な情報交換だけではなく，実際に共同研究を活発にするのにも意味が大きいと思っているわけです。将来は，むしろこういう種類の研究施設が増え，日本の大学と連携した形で，より意義のある，日本の学者と学生，そしてヨーロッパの学者と学生で共同の研究活動を行う環境が提供できるようになることを確信しております。

以上，大まかに話させていただいたんですが，問題提起にとどまったことを心苦しく思います。ご静聴ありがとうございました。（拍手）

コ　メ　ン　ト

人文科学研究所教授　高田時雄

司会　どうもありがとうございました。

それでは，人文研の高田教授からコメントをお願いします。

高田　ヴィータ先生は，主として欧米の東洋学の歴史と現状，さらに当面する幾つかの問題点についてお話ししていただいたわけですが，日本の東方学の将来についても極めて重要な課題をいくつか提出していただいたと思っております。

我々の研究所では，東方学と申しましても，主として中国を中心に，それと密接な関連を有する地域にかかわる研究を東方学と称してきたわけですけれども，ヨーロッパで生まれた東洋学の伝統から言えば，中国は辺境に属するわけで，その意味では実態はかなり異なるように思います。ヨーロッパそのものが西から東に発展していくにつれ，東洋学もどんどん拡大していきます。端的に言いますと，ヨーロッパの帝国主義的発展とともに東洋学が発展してきたということが言えるわけで，そういった東洋学のあり方に対する根底からの問いかけが，サイードのオリエンタリズム批判になったわけですけれども，幸いにしてと言いますか，中国がヨーロッパの東洋学の辺境であったがために，そのサイードの議論にかかわる部分が，日本の東洋学あるいは中国学ではあまり深刻な打撃を受けなかったという気がいたします。少なくとヴィータ先生の言われたような魔女狩りのようなことはないように思います。

もちろん，欧米におけるそういった反響を背景にして，日本の戦時中の軍国主義的な進出とからめるかたちで，日本の東洋学のオリエンタリズム的傾向を批判するような書物も２，３出てまいりましたけれども，我々は実はあまりそれを気にしないでやってきたわけです。というのは，日本の東洋学及び中国学は，ヨーロッパにおける古典古代の伝統に対比してもよいような要素をもっていたことが大きいのではないかと思います。

ヨーロッパにおいては東洋学というものが，深い古典学の伝統に立脚して成長してきて

いる部分というのが，やはり強く存在するのだ，とヴィータ先生も言われました。一方，中国学を中心とする日本の東洋学というものが，日本の古典学そのもの，或いは日本の古典学の中核部分を形作ってきたわけでありまして，そういう意味では，当然ながら日本の東洋学はヨーロッパとはかなり異なった伝統を持っているわけです。ただ，ヨーロッパの東洋学が，フィロロジカルな古典文献研究の一翼を担っているという部分では，日本の東洋学も，非常に近い体質を有するものだというふうにも考えられると思います。

これもヴィータ先生の御指摘ですが，各自の伝統，スタイルの独自性を認識することは，我々が，これからの日本の東方学の発展方向を考える場合に，大変重要なご提言であったと思います。ヴィータ先生は，主としてフィロロジカルな伝統を念頭において発言されたと思うのですけれども，今後の東洋学における日本の独自性というのは，他にもさまざまな面で主張すべき点があると思います。独自性をもたないとすれば，それはもはや優位性も主張し得ないことになるでしょう。

一方，中国学あるいは東洋学をめぐる情勢は，現在大きく変化しつつあります。過去20年ぐらいのあいだに，中国では「国際漢学」という表現がしばしば用いるようになりました。「漢学」というのは，Sinology という言葉の中国語訳です。Sinology というのは，当然ながら，欧米人による中国研究を指したことばでした。その用語を逆手に取って，近年の中国では「国際漢学」つまり国際的中国研究というふうなことを自ら言い出したというところに，情勢の変化が非常に大きくあらわれているのだと思います。

これまでの中国学，特に20世紀以前の中国学というのは，全く欧米人が中国を研究するものとしてありました。中国そのものに学問がなかったということではもちろんないですけれども，そういうふうな構図として成り立ってきたわけです。ところが，今後の中国学というのは中国自身の動向を抜きにしては語れなくなってきた。このへんに大きな構図の変化があるというふうに私は考えております。

そういう意味でも，我々は，現在の研究体制のありかたというのを，このままで情勢の変化に対応できるのかどうかということを視野に入れつつ，今し方ヴィータ先生の発言にありましたような，ベースの構築とか，国際的なネットワーク形成というようなことも考慮せねばならないかと思います。

司会　東方学の根幹にかかわる重要な問題提起の詰まったコメントでした。今後の討論でより議論を深めていただけるとありがたいと思います。

フィールドワークと歴史研究

愛知県立大学学長　森　正夫

司会　では続きまして，森正夫先生に「フィールドワークと歴史研究」という題で講演をお願いいたします。

森先生は，現在，愛知県立大学の学長という重責を担っておられますが，東洋史のほうでは明清時代の土地制度史の分野で文献実証主義的な手法によって非常に重厚な業績を上げられていると同時に，地域社会論ということを提唱されまして，日本の明清史研究をリードしておられる方です。1988年から名古屋大学の文学部，教養部の歴史学や地理学のスタッフを組織されまして，江南デルタの市鎮ですね，つまり長江デルタ農村部の中小都市について実地調査をされまして，『江南デルタ市鎮研究』という，こういう立派な論文集を生み出しておられます。

それでは，森先生，どうぞよろしくお願いいたします。

森　ご紹介いただいた森でございます。私は今も言及されましたような仕事に就いておりますので，私は目下，国立大学の独立行政法人化とか，それに伴う公立大学の法人化に関する動向とか，こうした問題の実態調査とそれに基づく研究，いわばフィールドワークをやっておりまして，あまり中国史研究や東方学のフィールドワークにかかわるような仕事をやっておりません。

ただ，会場を拝見いたしますと，前の席の発表者の方々，コメンテーターの方々，ご在席の皆様，すべて第一線の研究に従事しておられる方々ですので，むしろいろいろなことを学んで帰りたいと思っております。

お手元に材料がございますけれども，最初のものはレジュメ，その次に文献目録とさっきご紹介いただきました著作にかかわる調査関連の資料，それからその対象となりました江南デルタの地図等がございます。ただ，それぞれについてきめ細かくご説明することはいたしませんので，またついでの折りにご覧いただきたいと思っております。

４つの柱でお話いたします。

まず第１は，今日の中国史研究において，フィールドワークが，多様かつ積極的に活用されるようになってきているという状況について，ご紹介いたしたいと思います。

ごく最近，大阪大学をこの３月に退かれました濱島敦俊さんが，ここにあります『総管信仰――近世江南農村社会と民間信仰』という本を出されました。これは，文献目録の第１ページにスペースを割きましてごく簡単にその内容を紹介しておきましたけれども，フィールドワークという点においても非常に注目すべきお仕事であります。

濱島先生は，江南デルタの水利や徭役を中心に農村社会の構造を研究されておりましたが，この関係の文献資料の分析によるかぎり，農民の間に自生的な村落共同体の姿を確認

することはできませんでした。特に，日本等で非常に顕著に見られる水利をめぐる固定した共同体関係や組織を見出すことができなかった。しかし，農村の住民は，必ず何らかの共同的な組織を持ち，共同的なあり方をしない限りは，再生産は持続できないはずである。濱島先生は，そのように予測し，いろいろな角度からそれを探し求めた末，民間の信仰や祭祀の中に，共同の組織や共同の活動領域があるのではないかということを次第に感じられるようになりました。このことを長年にわたるフィールドワークの中で実際に検証され，また信仰・祭祀に関連する既存の文献の緻密な読解と結びつけてこの本を書かれたわけであります。

ここに『大阪大学文学部紀要』第34巻の１冊がございますが，この全冊が，濱島先生を中心とするチームのフィールドワークの1994年段階までの集積であります。その後も，さらに最近までずっとフィールドワークを続けておられまして，それがこの成果として結実いたしました。

従来使用し得た文献やこれまでの自他の研究に基づいて問題を設定し，そこから仮説を組み立て，この仮説をフィールドワークに基づく聞き取り調査や新たな資料の採訪によって解決したという点で，しかもまた，一定の明確な見通しを打ち出されたという点で，高く評価される業績であります。

この業績に先立ち，早くは80年代の末から90年代の初めにかけまして，義和団の故地である山東，河北，北京市，天津市の農村の民間信仰と結社集団を調査されました佐々木先生らのご研究がございます。

それからまた，近年は，華北農村慣行調査，後で若干言及いたしますが，この40年代の調査に基づくデータを手がかりにしながら，当該の調査の対象とされた村落群のうちの５ケ村を改めて調査し，この間50年の華北農民の生活史と農村社会の変革過程を研究されました三谷先生たちのご業績が出ております。このうち４ケ村についての非常に詳細な聞き取り調査の結果が，今皆様にお見せしておりますように，この２つの巨冊に整然とまとめられているわけであります。これに基づく研究が今後次々に発表されていくことと思われます。そのすべてをご紹介することはできませんが，三谷先生はじめ８人のご共著になる『村から中国を読む――華北農村五十年史――』という業績もその１つでございます。

いま１つだけ具体例をご紹介申し上げますと，菊地秀明さんが広西の移住民社会の広範な実地調査によるところの族譜・碑文等の収集に基づき，太平天国運動の前史をなした明清時代の移民社会のご研究の成果を，1998年に出版なさいました。ここにお示しする２冊の本でございます。注目すべきは，２冊のうち，１冊が分析結果を叙述した本編であり，他の１冊が資料編であることです。この資料編こそがフィールドワークの所産であります。数年をかけて行われた実地調査の際に，菊地先生は，あえて聞き取り調査をしないで，ほとんどすべての時間を，この辺境の貧しい地域の家々に大切に保存され，それゆえ既存の歴史研究では知られていなかった資料を克明に集める，そのことに全力を注ぎ，これらの大量の資料を用いて研究を進められたわけであります。

その他，レジュメと文献目録にありますように，いずれも興味深いお仕事がございます。

たとえば，上田信さんは，実地調査による中国の森林破壊・砂漠化・緑化につきまして，華北と華南の現在の生態・環境の現状を把握し，その上で過去にさかのぼって，現状に至る歴史的な過程を明らかにするという試みをなさっております。

一方，唐代の専門家である妹尾達彦さんも，実態調査を踏まえた黄土高原のフィールドワークに基づき，黄土高原の南端にある漢唐の長安城の遺跡を対象として，都市と灌漑との関係を研究し，その結果と砂漠化との関連についての見解を出しておられます。

このように，今日の中国史研究におきましては，フィールドワークが非常に多様かつ積極的に活用され，優れた作品が生まれつつあります。

ただ，振り返ってみますと，実はこうした近年の動きに先立って，戦中・戦後に，内外の法社会学・社会人類学・社会学等の研究者により実施された一群のフィールドワークがあり，その中国史研究への影響にも，多大なものがございます。それについてご紹介するのが，第２の柱でございます。

これも，内容につきましては，すべてをここで詳しく言及することはできませんが，1940年から42年にかけまして，末広厳太郎博士の指導のもとに，「中国社会に行われている法的慣行，即ち中国における社会関係を現実に規律し成り立たしめている法規範」を対象とし，あわせてさまざまな「徳義的・儀礼的・宗教等の規範」を含め，主として華北省の４カ村落，山東省の２カ村落について調査が行われました。周知の膨大な華北農村慣行調査であります。この調査の内容については，戦後，岩波書店から，２回にわたり，『中国農村慣行調査』として，ここにお示ししますこの大きさの版で合計６冊が刊行されております。この調査の中から，たとえば，村落共同体が果たして存在するのか，村の境界が果たして存在するのか，中国における共同体のあり方はどうなのか，それは日本とどう違うのか，などの問題が戦後のわが国の中国史学界に投げかけられました。特に旗田巍さんのお仕事は，この華北農村慣行調査と戦後史学をつなぐものでございました。

また，費孝通博士の *Peasant Life in China* という非常によく知られた業績がございます。これは，1936年に，江南デルタ，太湖東岸の呉江県の開弦弓村で，そのお姉さんの経営する合作製糸工場，日本のシルクに圧倒され非常に貧窮化した村の農民の経営を救うためにお姉さんが興しました，その工場を手伝う一方，農民に対して行った聞き取り調査をもとにいたしまして，社会人類学者マリノフスキーの指導の下で博士論文として完

成・出版されたものでありまして，戦後の日本における明清時代の社会経済史研究に非常に大きな影響を与えております。
その費孝通が，1980年代の初頭，すなわち開放政策の初期の時点で，かつての調査地点である呉江県に帰りまして，さまざまな専門家とともに社会調査を改めて実施し，今度は農村の中の町である市鎮の生産・流通に果たす役割に注目し，論文「小城鎮大問題」を発表いたしました。この論文をはじめとする一連の業績についてもさまざまな形で日本に紹介があり，大きな反響を巻き起こしております。

敗戦直後に刊行された福武直氏の『中国農村社会の構造』という戦時中の華中を中心とする調査の分析も，戦後まもなく大学で学んだ日本の中国明清史研究者にはよく読まれました。1960年代になってアメリカの社会人類学者スキナーの考え方が日本に将来されました。斯波義信氏によれば，農村の取引中心地である「市場町」を取り巻く「村落」の成員である農民たちは，取引関係や相互認知等を通じて，経済的，社会的，心理的に一個の統一体としての自覚をもつ共同体地域を形成している。スキナーはこうした共同体地域を「原基市場」と名づけ，その上部の「中間市場」,「中心市場」とともに三層をなす「市場共同体」が旧中国の社会構造を構成している，とします。スキナーのこの理論体系は，四川省成都盆地で，1949―50年に行われた農村調査をもとにしたものでありました。この仕事は，レジュメにも記しましたように，非常に大きな影響をその後の日本の明清史研究者や地理学研究者に及ぼしております。

このように，私たち日本の中国史研究は，実は戦後かなり早い時期から，戦中に行われたフィールドワークとこれに関連する研究，及び敗戦直後に当たる時期に行われたフィールドワークに基づくスキナーの理論的枠組などのさまざまな影響を潜在的にあるいは明示的に受けつつ展開され，80年代初頭の費孝通の新たな調査をふまえた問題提起からも多くを学んできたということが言えると思います。

最初にご紹介いただきました私たちのチームのフィールドワークとそれに基づく研究も第２の柱としてここまで述べてきた事情の中で出発しました。ただ，この研究は実はさまざまな契機から成り立っておりました。こうした私たちのチームの仕事についてのお話が第３の柱であります。

私たちが『江南デルタ市鎮研究』にまとめた作業を行った最も素朴な契機は，私たち1930年代から40年代までに生まれた，日本の中国研究者が，中国大陸から全く隔離されたままで40代まで，あるいは30代過ぎまで研究を続けてきたことと無縁ではありません。すなわち，私たちは，50年代以降に生まれた世代の方々と比べ，研究対象でありながら，いわば隔離されていた中国の風土と社会に対して非常に強烈な関心を持っておりました。とにかく，その地を踏んで，その風土と社会に接したいという要求にはやみがたいものがあり，こうした心情の延長線上に，中国での実地調査が位置づけられておりました。いま一つは，江南デルタそのものが経済的文化的先進地帯として戦後の明清時代史研究の中心的

な研究対象地域であり，同時に今日の中国においてもなおその先進性を保持していることが挙げられます。

最後に，こうした江南デルタの先進性の持続を支えたものが，量的にも質的にもこの地域でとりわけ発展した市鎮と市鎮のネットワークなのではないかという見通しがあります。この見通しを，一方ではフィールドワーク，他方では歴史学と地理学との共同研究から裏付けて見たいという要求が，私たちを動かしました。

ただ，本日のシンポジウムのテーマに即して申しますと，司会者のご紹介にもかかわらず，レジュメの３ページの下のほうに記しましたように，名古屋大学と南京大学の国際共同研究としてのこの事業は，実質は失敗でありました。江蘇省行政当局が，理由は示さないまま不許可にしたという理由に基づくものであります。

また，実地調査につきましても，88年段階ではやはり江蘇省当局の不許可によりまして果たし得ず，別の形の外面からの景観調査を一ケ月余にわたって続けるという結果に終わってしまいました。

89年には，南京大学の研究者の方々の了解を得て，上海の復旦大学のお世話で調査を始めましたが，天安門事件によりまして，89年の夏期休暇中の渡航が不可能になり，その秋に期間を大幅に短縮して行いました。そのような意味で，国際共同チームを担い手とするという点でも，じっくりとフィールドワークを行うという点でも非常に不備なものだったわけであります。

その結果として，１つの鎮，あるいはごく少数の鎮について，歴史学と地理学の研究者がそれぞれの課題に基づいて集中的に調査を行い，そうした調査の結果をもとに，個別に研究成果を交流することは不可能になりました。たとえば，私たちのチームには，歴史学者が３人，地理学者が３人おりましたが，この合計６名が６つの側面から，江南デルタの市鎮の形成過程や市鎮のネットワークの持つ意味を，時間をかけた共同のフィールドワークと現場での討論をもとに明らかにするという中心目標は実現できないままに終わったわけであります。

ただ，フィールドワークの面白いところは，そうした計画は実現しなかったけれども，結果としてさまざまな豊かな事象に直面し，その中で得たものが少なくなかったということであります。それについては４ページの下のほうに記しておきました。歴史学者３人について言いますと，当初の計画書に記載したそれぞれのメインテーマよりも，サブテーマのほうにかかわる非常に興味深いインタビューが偶然的にいくつも出ていたのであります。市鎮の行政機能や行政的な統括機能ということをメインテーマとして研究するはずだった私が，聞き取りを通じて，米問屋に当たる「米行」についての革命前後にわたる非常に興味深いデータを入手し，これを軸にして，サブテーマであった市鎮の通史を，調査対象である上海市の朱家角鎮について書くようになったことは，その１つの例でございます。

したがって，私たちのチームとしては，計画どおりの調査研究は実現できなかったわけでありますが，フィールドワークに伴う固有のさまざまな新しい事実の発見や経験が，歴

史研究にとってさまざまな新しい可能性や展望を付与するということを，失敗の中から発見いたしました。

最後に，歴史研究とフィールドワークの孕む課題というものについて，今までお話したことに直接かかわらないことも含め，簡単に触れまして終わらせていただきたいと思います。これが第４の柱であります。

人文科学研究所が私に与えられた課題は，フィールドワークが歴史研究にどのように役立つのか，あるいはフィールドワークが歴史研究の手段としてどのように有効かということであったと理解されます。こうした課題と取り組むことを通じて，東方学の新たな領域を切り開くきっかけにしたいということであったかもしれません。ただここでは，与えられた課題に正面から答えるのではなくて，少しそれを逆手に取りまして，歴史研究とフィールドワークはどのようにかかわるのかという視角から整理をしてみました。

これについても，レジュメに記しましたすべての論点を尽くすことはできませんけれども，私が一番申し上げたいことの第１は，歴史研究そのものが本来現実性・実践性を持ったものであるべきであり，フィールドワーク自体ももともと現実性・実践性をはっきり持ったものであることです。歴史研究もフィールドワークも，それぞれの本来のあり方においては，実は非常に共通した点があるのではないかということであります。

歴史研究の原点は，現実に直面する課題を解決するために過去からの道程を検証することであり，また過去からの道程に即して現実の課題を解決する方法を模索することであります。一方，フィールドワークの場合も，実はフィールドワークの方法論の確立者として知られた人類学者マリノフスキーが，その弟子であります費孝通の Peasant Life in China に寄せました序文を見ますと，現実の課題の解決と緊密な連関がございます。マリノフスキーは，費孝通が中国農村社会の現実に直面している課題に非常に強い関心を持って著作に結実させたということをきわめて高く評価しております。すなわち，社会人類学とフィールドワークの方向自体が実際は現実の課題の解決を目的とすべきであることを，フィールドワークの方法の創始者たるマリノフスキー自身が言っているのであります。今後，私たちが，歴史研究とフィールドワークのかかわりについて考える時に，この点を念頭に置かなければいけないのではないかと思います。歴史研究にとって，フィールドワークは，プラグマテイックな意味で役に立つから，それを導入する。歴史研究とフィールドワークとをそのような意味で関係づける。もし，私たちがそうした姿勢をとるならばそこには大きな落し穴があるのではないかと感じます。

第２は，外国史研究者としての日本人の中国史研究，及び外国人としての日本人研究者による外国としての中国のフィールドワークとは一体何なのかという問題でございます。これは，換言すれば，日本の中国史研究や中国を対象とするフィールドワーカーが直面する現実的課題とは果たして何かということであります。中国の近現代史とか中国の環境・生態史などの場合には，ある意味では，事が同時代に属し，かつ日本とのかかわりも明白

であって，何が現実的課題かが見やすいわけであります。けれども，中国の前近代史，特に宋元時代史以前の歴史の場合には，外国人である私たちにとって一体何が現実的課題になるのかということは，改めて考えなくてはいけない。しかし，私は，決してそこにも現実的課題がないわけではないというふうに考えております。たとえば，近現代の日中関係をめぐる政治的課題は私たち日本の研究者にとっての避けて通れない現実的課題ですが，中国史研究者にとっての現実的課題は決してそれにとどまるものではありません。私たちが日々直面する日本の文化や社会のあり方にかかわる多様で奥深い問題の認識や解決もまた，私たちにとっての緊要な現実的課題ではないでしょうか。

第３に，歴史研究の対象としての中国社会の持つすぐれて中国的な特質の問題があるように思われます。中国は文献の国と言われているのですが，実はフィールドワークによってはじめて明らかになる側面があるのではないかなと思っております。通常の文献においての記録がほとんど稀な民間信仰などもその一例であります。

第４に，歴史学は，隣接科学において確立されつつある方法論としてのフィールドワークを，本格的に摂取する必要性があると考えます。そしてまた，そこには豊かな可能性もあると思います。もとより摂取と言っても容易ではないのですが，この面での努力も開始されております。すなわち，歴史学と，歴史学の隣接科学の方法としてのフィールドワークとの関係については，濱島先生と中国の農村での調査を共になさいました大阪大学の片山剛先生が，須藤健一編『フィールドワークを歩く――文科系研究者の知識と経験』という書物の中で１つの試論を提出されております。

第５に，歴史学の基盤としての文献資料の発掘に際して，いわゆるフィールドワークの役割が非常に大きいことが挙げられます。目下，中国の歴史研究者・歴史学界による地方資料の発掘・整理・出版というのは，実に積極的に行われております。こうした作業は，それ自体フィールドワークと名付けられてはおりませんけれども，まぎれもなくフィールドワークの所産であると考えております。レジュメに挙げました黒田明伸さんご紹介の『退想斎日記』は，19世紀半ばから20世紀半ばまでを生きた山西省赤橋村の読書人劉大鵬のものした貴重な記録で，山西大学の研究者が発掘したものですが，これなどは，その有力な例であると思います。

第６に，文献資料の整理方法自体の持つフィールドワーク的性格を指摘させていただきたいと思います。いわゆる実地調査としてのフィールドワークではないけれども，足で歩く国際的調査をも援用しながら，文献資料を広範な角度から研究していくという方法もその一つではないかと考えます。夫馬進先生の最近の「使琉球録」に関する共同研究もそうした性質をもっているのではないかと思っております。

第７に，どうしても注意したいと思うのは，文献資料の活用方法自体の持つフィールドワーク的性格であります。人文科学研究所の岩井茂樹先生がなさった，現代中国の新聞・雑誌・広告・行財政資料を広く渉猟・分析し，その作業を通じて，明代から現代までの財政システムの時代を超えて貫通する構造上の特質を導き出すというお仕事は，それに当た

ると見ております。

他にも，地域史の叙述におけるフィールドワークの役割をはじめ，いろいろな課題がございますが，時間が大幅に過ぎてまいりました。結びに代えて申し上げたいことは，先ほど触れましたように，歴史研究とフィールドワークとの学問としての，あるいは方法としての近接性であります。私が大学院生であった折，故島田虔次先生は，日中の国交がなく，フィールドワークなど考えられもしなかった60年代前半のその時期に，「生きた中国とかかわることなしに中国研究はあり得ない」と発言されました。このご発言は，本日私に与えられた課題とはまったく異なった文脈の中で行われたものでありますが，歴史研究，その一環としての中国史研究とフィールドワークの両者が，生きた現実とかかわるという点において非常に強い共通性を持っていること，さらに進んで両者が内的な連関をもっていることを示唆するものではないかと思っております。

時間が大幅に過ぎ，申し訳ございません。これで終わらせていただきます。（拍手）

［文献目録］

濱島敦俊『総管信仰――近世江南農村社会と民間信仰』（研文出版。2001年①）

濱島敦俊・片山剛・高橋正『華中・南デルタ農村実地調査報告書』（『大阪大学文学部紀要』第34巻。大阪大学。1994年）

濱島敦俊・片山剛・横山政子『華中・南デルタ農村実地調査報告書』「第一部　江南デルタ」索引（『大阪大学文学部紀要』第34巻別冊。大阪大学。2001年②）

濱島2001①の内容：

明清時代，とくに明中期――清中期，15―18世紀の文献研究と1990年代前半に江南デルタで実施した実地調査とを結合。

◆15―18世紀江南デルタにおける水資源の確保・分配において，農民の間に自生的な村落共同体は確認できない＝水利をめぐる固定した共同体関係あるいは組織を見出すことができない。

◆清朝後期，とくに19世紀40年代の江南デルタ小作農民の暴動に関する文献研究及び南宋――清朝後期，12・３世紀―19世紀の文献研究（※）

1990年代前半に江南デルタで実施した実地調査（※※）

⇒農村住民の共同の祭祀・信仰の領域，農村住民の社会的共同性を成立せしめる一つの契機としての共同祭祀

⇒江南デルタ固有の土神――総管（金総管）・猛将（劉猛将あるいは劉王）・李王＝総管・総管信仰

⇒市鎮を中核とする共同祭祀・信仰の領域が成立している。その祭祀・信仰圏はフラットなものではなく，中心廟＝上位廟に対する土地廟＝下位廟の祭祀圏を含むものであった。

※

鄭光祖『一斑録雑述』巻７・道光26年（1846）夏，旧蘇州府昭文県東部張市一帯の抗租暴動の記事：〔府知事〕は「魔物が取り憑いて誤った託宣を下し，民を惑わせたに相違ない」として，村々の小廟に鎮座する『総管理・周神・猛将・李王』四種類の神像を捕縛せしめ，これらを県城に連行，昭文県城隍廟の路頭堂（だいもん）に曝し，「神籤でもって衆を惑わせた咎」を示した。

※※

①1991年９月24日上海市青浦県章練塘鎮における鎮の老商人たちからの城隍廟会及び周辺集落の「朝集」（下位廟の神像が担ぎ出され，特定の上位廟に表敬すること）に関する聞き取り調査など。

②1991年９月78日上海市嘉定県婁塘鎮婁南村における年輩の住民からの土地廟の「廟地界」（当該土地廟と関係をもつ聚落群）に関する聞き取り調査など。

③現代の民間伝承の採訪記録である鍾偉今編『湖州風俗志』の発見など。

川勝守『明清江南市鎮社会史研究』（汲古書院。1999年）

寺地遵『近世中国，江南市鎮における水辺都市施設の発達に関する総合的研究』（平成10～11年度科学研究費補助金・基盤研究(C)(2)研究成果報告書）

路遙・佐々木衛編『中国の家・村・神々』（東方書店。1990年）

佐々木衛編『近代中国の社会と民衆文化――日中共同研究・華北農村社会調査資料集――』（東方書店。1992年）

聶莉『劉堡（劉氏の村）――中国東北地方の宗族とその変容――』（東京大学出版会。1992年）

三谷孝編『中国農村変革と家族・村落・国家――華北農村調査の記録――』第１巻（汲古書院。1999年）

三谷孝編『中国農村変革と家族・村落・国家――華北農村調査の記録――』第２巻（汲古書院。1999年）

内山雅生著，李恩民・刑麗生訳『二十世紀華北農村社会経済研究』（中国社会科学出版社。2001年）

菊池秀明『広西移民社会と太平天国〈本文編〉』（風響社。1998年）

菊池秀明『広西移民社会と太平天国〈資料編〉』（風響社。1998年）

山田賢「伝統中国における同族結合・同郷結合に関する覚書――四川省雲陽県訪問記――」（山田賢著『移住民の秩序――清代四川地域社会史研究――』第２章「移住民社会と地域エリート――雲陽卜氏の軌跡――」附編。名古屋大学出版会。1995年）

渋谷裕子「清代徽州休寧県における棚民像」（山本英史編『伝統中国の地域像』第６章。慶応義塾大学出版会。2000年）

臼井佐知子「徽州文書と徽州研究」（森正夫等編『明清時代史の基本問題』。汲古書院。1997年）

唐力行『明清以来徽州区域社会経済研究』（安徽大学出版社。1999年）

上田信「村に作用する磁力について」（上）（下）（『中国研究所月報』455・456。1986年）のち，橋本満・深尾葉子編訳『現代中国の底流：痛みの中の近代化』（行路社。1990年）に所収。

上田信『森と緑の中国史――エコロジカル・ヒストリーの試み』（岩波書店。1999年）

可児弘明『近代中国の苦力と豬花』（岩波書店。1979年）

田仲一成『中国祭祀演劇研究』（東京大学東洋文化研究所。1981年）

田仲一成『中国の宗族と演劇』（東京大学東洋文化研究所。1985年）

田仲一成『中国郷村祭祀研究――地方劇の環境』（東京大学東洋文化研究所。1989年）

田仲一成『中国巫系演劇研究』（東京大学東洋文化研究所。1993年）

妹尾達彦「環境の歴史学」（『アジア遊学』20【特集】黄土高原の自然境と漢長安城（勉誠出版。2000年①）

妹尾達彦「関中平原灌漑設施変遷与唐代長安的面食」（史念海主編『漢唐長安与関中平原』（『中国歴史地理論叢』【季刊】1999年12月増刊。陝西師範大学。1999年）

妹尾達彦「唐代長安城与関中平原的生態環境変遷」（史念海主編『漢唐長安与黄土平原』（『中国歴史地理論叢』【季刊】。陝西師範大学。1998年４月増刊）

妹尾達彦「日中共同研究『中国黄土地帯の都城と生態環境史の研究』1997－1999年」（『唐代史研究』３号。唐代史研究会。2000年②）

妹尾達彦「都市と灌漑：関中平野2000年の歴史的経験」（『日中共同シンポジュウム　中国黄土地帯の

都市と生態環境の歴史』。文部省科学研究費基盤研究[A]「中国黄土地帯の都城と生態環境史の研究」報告要旨録。2000年③)
中国農村刊行調査会編『中国農村刊行調査』第１－第６巻（第１刷　1952－58年。第３冊　1981年。岩波書店）
古島敏雄「中国農村刊行調査を読んで」（『歴史学研究』166）
幼方直吉「アジア地域研究の方法」（『思想』1963年12月号）
野間清「中国農村慣行調査の企画と実績――中国研究における主観的善意とその限界（『歴史評論』170。1964年）
旗田巍「華北農村における『開葉子』の慣行　附，落穂拾い，柴草の採取――村落共同体的関係への再検討――」（『史学雑誌』58－10。1949年）
旗田巍「中国の土地改革の歴史的性格」（『東洋文化』４。1950年）
旗田巍「中国村落研究の方法――平野・戒能論争を中心にして――」（仁井田陞博士追悼論文集第２巻『現代アジアの革命と法』（勁草書房。1966年）
旗田巍『中国村落と共同体理論』（岩波書店。1973年）
仁井田陞『中国法制史』（岩波全書。岩波書店。1952年）
村松祐次『中国経済の社会態制』（東洋経済新報社。1949年）

Philip C. C. Huang（黄宗智），*The Peasant Economy and Social Change in North China*, Stanford University Press, 1985
［中文繁体字版］《華北的小農経済与社会変遷》。香港。牛津大学出版社。1994年。
Philip C. C. Huang（黄宗智），*The Peasant Family and Rural Development in the Yangzi Delta, 1350-1988*, Stanford University Press, 1990
［中文版］《長江三角洲小農家庭与郷村発展》。北京。中華書局。1992年。
石田浩『中国農村社会経済構造の研究』（晃洋書房。1986年）
石田浩『中国農村の歴史と経済――農村変革の記録――』（関西大学出版部。1991年）
Fei Hsiao Tung(費孝通)，*Peasant Life in China*, G. Routeledge-London, Dutton-New York, 1939.
［邦訳１］仙波泰雄・塩谷安夫共訳『支那の農民生活――揚子江流域における田園生活の実態調査――』（生活社。1939年）
［邦訳２。増補を含む］小島晋治ほか訳『中国農村の細密画――ある村の記録　1936－82』（研文出版。1885年）
［邦訳１］所載，ロンドン大学の人類学者で費孝通の指導教授であったB.マリノフスキーが本書英文原著に寄せた序文より
「費孝通博士の著書『中国の農民生活』は，人類学的農村研究並びに学説の発展上の一つの指標として数えられるであろうことを私は敢えて予言する。」「本書は見知らぬ土地における異国的印象を探る局外者によって書かれたものではない。それは一市民が自らの民衆について行った観察を含んでいる。（中略）もちろん自らの民衆に関する人類学は至難のものであるが，それはまた農村研究者の最も価値ある業績となるものである。」
「若き中国の愛国者としての費博士は，ただに中国の現在の悲劇に対してのみならず，又西欧化するか死滅するかという彼の巨大な母国のジレンマに含まれた，ずっと大きな問題に対しても十分に敏感である。」
「〔費孝通の師である燕京大学の社会学者〕呉教授及び彼が訓練し得た若き学徒たちは，その巨大な国の文明を理解するためには，又それを他の人たちに知らしめるためには，中国の実生活の書を読み，生きている中国人の心がいかに現実の中に働いているのかを知るのが必要であることを，先ず何よりも認識したのであった。中国という国は最も長い綿々たる伝統をもっている故にこそ，中国歴史の理解は今日の中国がいかなるものであるかの了解から始めねばな

らない。」
福武直『中国農村社会の構造』（大雅堂。1946年）のち，『福武直著作集』第９巻（東京大学出版会。1976年）に所収。
小山正明「明末清初の大土地所有――とくに江南デルタ地帯を中心として――」（『史学雑誌』66―12・67―１。1957・58年）のち，小山正明『明清社会経済史研究』（東京大学出版会。1992年）に所収。
濱島敦俊『明代江南農村社会の研究』（東京大学出版会。1982年）
費孝通著・大里浩秋・並木頼寿訳『江南農村の工業化　“小城鎮”建設の記録1983～84』（研文出版1988年）
宇野重昭・朱通華編『農村地域の近代化と内発的発展論――日中「小城鎮」共同研究――』（国際書院。1991年）
Skinner, G. W., “Marketing and Social Structure in Rural China”, *The Journal of Asian Studies*, Vol. XXIV, No. 2, Feb. 1965 ; Vol. XXIV, No. 3, May 1965
［邦訳］今井清一・中村哲夫・原田良雄訳『中国農村の市場・社会構造』（法律文化社。1979年）
斯波義信「G・ウイリアム　スキナー著　中国農村社会における市場・社会構造　Ⅰ部・Ⅱ部・Ⅲ部」（『東洋学報』49―２・「批評と紹介」。1966年）百瀬弘「清代直隷青県市場共同体雑考」（『東洋史研究』27―３。1968年）
古島和雄「旧中国における土地所有とその性格」（山本英夫・野間清編『中国農村革命の展開』。アジア経済研究所。1972年）のち，古島和雄『中国近代社会史研究』
（研文出版。1082年）に所収。
中村哲夫「清末華北の農村市場」（野沢豊・田中正俊編『講座中国近現代史』２・義和団運動」。東京大学出版会。1978年）
中村哲夫『近代中国社会史研究序説』（法律文化社。1984年）
石原潤「定期市研究における諸問題――特に都市発達史との関連において――」（『人文地理』20―４。1968年）
石原潤「華中東部における明・清・民国時代の伝統的市（market)について」（『人文地理』32―３。1980年）
石原潤『定期市の研究：機能と構造』（名古屋大学出版会。1987年）
樊樹志『明清江南市鎮探微』（復旦大学出版社。1990年）
森正夫編『江南デルタ市鎮研究――歴史学と地理学からの接近――』（名古屋大学出版会。1992年①）
森正夫「朱色角鎮略史」（江南デルタ市鎮研究――歴史学と地理学からの接近――』前掲。1992年②）
森正夫「1988年夏江南デルタ小城鎮紀行」（『名古屋大学文学部研究論集』史学36。1990年）
森正夫「現代中国の鎮における居民委員会と住民の生活意識――上海市青浦県朱家角鎮の場合――」（『和田博徳教授古稀記念　明清時代の法と社会』。汲古書院。1993年）
森正夫「1930・40上海平原農村における宅地所有について」（『名古屋大学文学部研究論集』史学38。1992年）
森正夫「中国前近代史研究における地域社会の視点――中国史シンポジウム『地域社会の視点――地域社会とリーダー』基調報告」（『名古屋大学文学部研究論集』史学28。1982年）
稲田清一「清末江南における一郷居地主の生活空間」（『史学雑誌』99―２。1990年）
稲田清一「清末江南の鎮董について」森正夫編『江南デルタ市鎮研究――歴史学と地理学からの接近――』（名古屋大学出版会。1992年）
斯波義信　書評「森正夫編『江南デルタ市鎮研究――歴史学と地理学からの接近――』『エコノミスト』1993年１月12日号）
石田浩書評　仝上書（『社会経済史学』59―２。1993年）
小島泰雄批評・紹介　仝上書（『東洋史研究』52―２。1993年）

B・マリノフスキー著　寺田和夫・増田義郎訳『西太平洋の遠洋航海者』（〔世界の名著〕59。中央公論社。1967年）（パプアニューギニア，とくにトロブリアンド諸島での1915―1918年の調査に基づき，1922年に発表された民族誌←須藤後掲書）
須藤健一編『フィールドワークを歩く――文科系研究者の知識と経験』（嵯峨野書院。1997年）
片山剛「各論――フィールドワークの〈いま〉――文科系研究者38人の事例・５歴史学・概説」（須藤健一前掲書）
片山剛「各論――フィールドワークの〈いま〉――文科系研究者38人の事例・５歴史学・②東洋史―中国近世・近現代史のフィールドワーク」（須藤健一前掲書）
加藤久美子「聞き取り調査と歴史学」（『いま，歴史資料を考える――名古屋大学文学部創設50周年記念公開シンポジウム報告集――』（名古屋大学文学部史学科。1999年）
稲田清一「清代江南における救荒と市鎮――宝山県・嘉定県の『廠』をめぐって――」（『甲南大学紀要』文学編86。1993年）
稲田清一「清末，江南における『地方公事』と鎮董」（『甲南大学紀要』文学編109。1999年）
佐藤仁史「清末民国初期」における一在地有力者と地方政治――上海県の《郷土資料》に即して」（『東洋学報』80―２。1998年）
太田出「清代緑営の管轄区域とその機能――江南デルタの汎を中心に――」（『史学雑誌』107―10。1998年）
森正夫「江南デルタの郷鎮志について――明後半期を中心に――」（小野和子編『明末清初の社会と文化』。1996年）
森正夫「清代江南デルタの郷鎮志と地域社会」（『東洋史研究』58―２。1999年）
劉大鵬著・喬志強標注『退想斎日記』（山西人民出版社。1990年）。
劉大鵬著・慕湘／呂文幸点校『晋祠誌』（上・中・下）（山西人民出版社。1986年）
『中国地方志集成』「郷鎮志専輯」全32冊（上海古籍出版社。1992年）
石井進『中世の村を歩く』（朝日選書648。朝日新聞社。2000年）
黒田明伸「二〇世紀初期太原県にみる地域経済の原基」（『東洋史研究』54―４）
夫馬進編『増訂　使琉球録解題及び研究』（榕樹書林。1999年）
岩井茂樹「徭役と財政のあいだ――中国税・役制度の歴史的理解にむけて㈠～㈣」（経済経営論叢）28―４，29―１，29―２，29―３。1994年３月，６月，９月，12月）

コ　メ　ン　ト

人文科学研究所教授　小南一郎

司会　どうもありがとうございました。

コメントは，人文研の小南教授からお願いします。

小南　ただいま森先生から，歴史学の研究とフィールドワークとの関係について，実際の調査例を踏まえながら，ご紹介と同時に，いろんな問題提起もしていただきました。お話しをお聞きして，私自身は歴史学ではなくて，思想・文学の方面の研究をいたしておることもあり，歴史学におけるフィールドワークの役割と，我々が関係いたします文学・哲学の方面において想定されるフィールドワークとでは，相当に性格が違うんではないかとい

うことを，まず感じました。まだ今，お聞きしたばっかりで，それをちゃんとまとめる時間がないのですけれども，いろんな点で，文学・哲学領域で想定されるフィールドワークと，その持つ意味が異なっているように思えます。

例えば，お話しの中で盛んに「文献」ということを言われました。フィールドワークといろんな文献との結合が必要であり，文献を基礎にしながらフィールドワークの現場に入って調査をするのが基本になると言われたのですが，その文献が，我々が「文献」と言いますものと相当違ってるんではないかという感じが，まずいたします。文学・哲学領域で「文献」として扱っていますテキストは，主として，その文献自体で一定の価値を持ってるもの。必ずしも現場に直接かかわって初めて意味を持つんじゃなくて，逆にテキストだけで独立しても一定の意味を持つものが，我々が扱ってる主要な対象である。そうであるとすると，その「文献」とフィールドワークとの結合とに，その必然性がどの程度まであるのかについて，もう少し詳しく考えてみる必要があるんじゃないでしょうか。

例えば，柳宗元が南方に流された時に，南方の山水・自然に即した作品をつくっている。確かに，現地に行けば理解がより深くなるに違いないんですけれど，歴史学におけるフィールドワークとは，その必然性の点で相当に違っています。もちろん，文学者の生まれ故郷に行き，哲学者の生活環境に直接触れることは，意味を持つに違いないのですが，それが作品理解のために不可欠だとまでは言い切れないでしょう。

私自身は，哲学・文学の研究をいたすもので，よく言われますように，京大の中国学は清朝の考証学のあとを受け継いだものであって，いわゆる読書の学，何よりもテキストを正確に読むことを重視してやる学問だということで，教えを受けてきました。そうしたことから，もっぱら本になってるテキストを詳しく読むことが主要な仕事であって，そうした時に，石刻を参照したり，あるいは古い写本なんかを参照することはもちろん必要なんですけど，それを「こういうテキストがある」と言って鬼の首を取ったように振り回すと，かえって先生方は嫌がられました。

私の恩師である吉川幸次郎先生は，そういったことを「やる必要はない」とは言われませんでしたが，そういうことは本質ではないとしておられました。現在伝わってるテキストをじっくり読んで，それを校定することによって，すなわち，現存の最も正統的なテキストに対する厳密な考証を通じて，より古いテキストにもさかのぼっていくことができるんだ。文献学者がけったいな版本を見つけてきて，鬼の首を取ったように振り回しているのは，あれはよくないんだというふうな教育を受けてきたわけです。私自身も，それが文献に対する正しい対し方だろうと，現在でも思っております。

中国の最も伝統的な文化，文化の精髄をなす部分は，そのようにして伝えられ，最も価値あるものは，やはり後世に遺って来たのだと考えております。しかし，それが中国の文化の全てではなく，それ以外の部分に，相当に重要でありながら，いわば中国文化が忘れてきた部分があるんではないかと考えます。

例えば敦煌文書の例からもわかりますように，もし敦煌の文書が発見されなければ，例

えば変文という一つの重要な語りものの領域があったこと，あるいは王梵志の詩を含む通俗的な歌謡があったということが，現在からどの程度推測できただろうかと考えるとき，中国文明が忘れて来た部分の大きさが推測できるように思います。中国の伝統的な文明の，上層の精華とも言うべき部分は確かに受け継がれるのであるが，その下層にあった，より人々の生活に密着した部分はきれいに忘れて来た。きれいに忘れたと言うとあるいは語弊があるかもしれませんが，そういった部分は十分に継承されないという傾向が強くあるのではないか。

最近，宝巻という，変文のあとを引き継いだ，宗教的な語りもの，歌いものを少しずつ読んでおりますが，そうしたテキストを通じて我々が理解できますのは，筋書きと表現だけであるわけです。しかし，そうした要素は，宝巻という文藝が備えていた本質的な意味から，いささか離れたものであるわけです。宝巻の筋書きだけを抜き出してみても，この文藝が人々の間で流行した意味は，十分にはわからない。民衆層の宗教的な文藝を理解しようと思ったら，やっぱりそれが実演された場や聴き手たちの性格，さらには，それを生み出した人々の生活を知らねばならない。それがないと，筋書きの継承を追った系統図は書けても，実際にその文藝が持ってた意味は理解できないんではないか。そのように考える時，これまでやってこられた歴史学者たちの農村あるいは都市に入ってのフィールドワークという方法が，文学・宗教領域においても，極めて重要なものになるんではないかと思っております。

ただ，名前を挙げては失礼かもしれませんが，田仲一成先生が，中国の宗教的な藝能の現地調査をして，その結果をまとめた大きな本を何冊も出しておられます。私自身，確かに田仲先生の書物からいろんなことを学び取っているのですが，しかし，それぞれの文藝が民衆層の中で持っていた価値については，必ずしも田仲先生のフィールドワークの記録だけでは十分に分からない。田仲先生の方法は，本質的に歴史家のものであるように思います。そうしたことから，フィールドワークと文献，価値観を持った文学だとか哲学の文献とを結びつけるための方法は，むしろこれから考えてゆかねばならないものでしょう。その方法は，単に考えるというより，むしろ現地での調査を通じて，試行錯誤の中で編み出すものではないかとも思います。

あまりコメントにもなりませんのですけども，ご報告を聞いて，こうしたことを感じました。以上です。（拍手）

司会　森先生の話は，フィールドワークの手法を歴史研究に採り入れられたパイオニアであるからこそ見えるいろんな問題点をご指摘いただいたと思います。

中国における現代史研究の意義

中国社会科学院近代史研究所所員／中国中央文史研究館館員　楊　天石

司会　では続きまして，第３番目のパネラーとして，中国の楊天石先生にお願いいたします。

楊天石先生は現在，中国社会科学院近代史研究所の研究員をしておられまして，ご出身は北京大学の中国文学系です。文学のご出身でありながら，歴史のほうにも非常に深い学殖をお持ちでありまして，明清時代から現代に至るまで，哲学・文学・史学にわたる広範な業績を残しておられます。

本日は，「中国における現代史研究の意義」というテーマでお話いただきます。なお通訳は，研究所の岩井教授にお願いします。

楊　中国は長い歴史をもつ国です。古えの時代から，中国人は歴史学の重要性を認めていました。「孔子が『春秋』を著すと乱臣賊子が懼れた」と言われていますが，これは，歴史学には特殊な思想的な力があり，悪事をはたらこうとする者を懼れさせることができるという意味です。また，「銅をもって鏡を造れば，衣冠を正すことができる。歴史を鑑とすれば，得失を知ることができる」とも言われています。これは，先人の成功の経験と失敗の教訓を人が認識することを，歴史学は助けるのだという意味です。このため，中国人は昔から歴史学を「経国の大業」であり，治国・平天下に利する大学問であると見なしていました。中国古代には『資治通鑑』という偉大な歴史書があります。この書物は，歴史学が国家の建設と社会の安定のうえにおいて果たす大きな作用をあざやかに説明しています。

アヘン戦争以後，とりわけ1919年の五四運動以後，中国の社会には大きな変化が起こりました。これ以降の中国の歴史を研究することは，とりわけ重要な意義をもっています。

一，中国の国情を認識し，中国にもっともふさわしい発展の道をみいだし，中国の改革・開放を推進する助けとなります。周知のことですが，中国は20世紀50年代から，改革・開放政策の開始まで，曲折した道を歩んできました。その原因の一つは，歴史の経験を正確に総括することができなかったことにあります。例えば，経済モデルの問題です。単一の社会的所有（国有および集団所有）に基づく経済が良いのか，あるいは複数の所有形態が混合した経済が良いのか？　ある時期，人々は単一の社会的所有にもとづく経済がよいと考え，大急ぎで三大改造（農業，手工業，資本主義商工業）をやり，あらゆる非社会的所有の部分をばっさり片づけてしまいました。その結果，人々の手足は縛られ，積極性は抑圧されました。経済成長の速度はかえって遅くなり，1958年の「大躍進」は「大躍退」になってしまいました。実は，孫中山は早くから，中国社会は欧米に比べるとはるかに遅れており，共産主義を実現する条件も，また資格もないということを指摘していまし

た。国家がすべてを引き受けることはできず，国民経済を独占する大工業こそ，国家が興すけれども，それ以外の企業は民衆にやらせ，国家は法的な保護をあたえて奨励すべきだ，と。もし，我々がこのことを認識するのが早ければ，曲折した道を歩まなくてもすんだでしょう。人類社会は複雑多様であり，ひとつの色によって世界を塗りつぶすことはできないし，同じように一つの経済モデルが天下を支配することもできないのです。孫中山はさらに，近代文明は良い結果ももたらしたが，悪い結果ももたらしたのであり，「良いところを取り，悪いところをさける」ためには，近代文明の優れた成果を存分に吸収すると同時に，その禍害をできるだけ回避せねばならないと指摘しました。近年，我々は近代文明の優れた成果を吸収することに努めています。しかし，禍害を回避することについては，まだ不十分です。いくつかの地方では，環境汚染は受忍の限度を超えていますし，腐敗汚職や貧富の格差の問題も日一日と深刻になっています。これらの問題も，もし予見して事前に備えておけば，状況はずっと良くなっていたでしょう。

このような事例はさらに多くあります。

例えば，辛亥革命の前に，梁啓超はこのように預言していました。社会主義国家の権力は大きすぎ，管理する事が多すぎる。生産を握ったうえに，分配を握り，生活を握れば，「専制」の問題が生じるであろう，と。

辛亥革命後，孫中山は開放政策の問題を提起し，資本主義と社会主義と，二つの進歩の力を調和させ，外国の資本主義を利用して中国の社会主義を作り上げることを主張しました。過去，人々はこれを孫中山の軟弱性のあらわれだと考えていましたが，じつはこれこそ孫中山の思想が深く，また優れていた所以です。

我々は，歴史上の人物のさまざまな智慧と経験を上手に吸収し，それによって自己を豊かに充実させるべきです。マルクスがあれば，毛沢東・鄧小平があれば，そのほかの人物の智慧と経験は重きをおくに足りないというのは，狭い，誤った，また有害な考えです。歴史上の人物の経験と智慧を吸収しようとすれば，歴史を研究するほかに方途はありません。

さらに政治モデルの問題もあります。中国ではこのように言われていたことがあります。辛亥革命以後の歴史が証明するように，西洋の民主主義は中国では通用せず，かならずロシア人の歩んだ道を歩まねばならない，と。じつは，これまた近代中国の歴史についての誤った認識です。確かに，辛亥革命以後，西洋より移入された制度のいくつか（選挙制度，議会制度，分権制度，監察制度）は中国の人民に本当の民主主義をもたらすことはありませんでした。しかし，これは主として封建勢力の強大，伝統の重圧，軍閥による妨害と破壊の結果であり，けっして制度そのものの問題ではありません。西洋の民主主義制度には，西洋にしか適用できないものもあります。しかし，その多くは人類が長期にわたって蓄積してきた文明の成果であり，普遍的な価値をもっています。西洋のものであることを口実にしてこれを拒絶し，反対していると，専制主義を保存する結果となります。今後，中国人が政治改革を行おうとすれば，世界各国の政治制度のなかからあらゆる優秀なものを吸

収せねばなりません。

二，大陸と台湾との間の矛盾を認識しそれを解消して，台湾海峡を挟んだ双方の合作と統一を促進する一助となります。中国の現代史上，共産党と国民党とは二度合作し，二度分裂しました。合作しているときは，両党の党員は肩を並べて戦い，互いに同志と呼び合いました。分裂しているときは，両党は刃を交え，生きるか死ぬかの争いをしました。当時，国民党は共産党を「共匪」と呼び，共産党は国民党を「蒋匪」と呼びました。実際には，互いに接触をもち意志を通じあえば，だれも「匪」ではないことを見いだすのです。台湾の歴史学界に蒋永敬教授という方がおられます。国民党の兵士であったことがあり，まさしく「蒋匪」です。しかし，私は彼と知り合いになって，おっとりとして思いやりがあり，誠実かつ善良な優れた学者であって，ひとかけらの「匪」の気味もない人だということを発見しました。ですから，私たちは良い友達になり，私は彼を「蒋どの」と呼んでいます。生活もこのようであれば，歴史もこのようなものです。国共の間の矛盾は，今日あらためて研究すると，ある部分では（すべてではないにせよ）急進派と穏和派の矛盾でしかないことを見いだすのです。外交を例にあげると，共産党は断乎として妥協せず帝国主義に反対しました。国民党は平和な手段，交渉の手段によって不平等条約を撤廃することを主張しました。また，土地問題では，共産党は大衆運動をつうじ，暴力によって地主から土地を奪うことを主張しました。国民党は，「小作料二割五分減免」からはじめて，地価税を徴収するという方法によって，地主の特権をしだいに消滅させようと主張しました。当然，両党の間には是非の争いもありましたが，共産党がすべて正しかったわけではなく，国民党がすべて間違っていたわけでもありません。例えば，1927年３月，陳独秀と呉稚暉の間で論争がありました。当時，陳独秀は，中国は三十年以内にレーニン流の共産主義を作り上げることができると考え，呉稚暉は，絶対に不可能だ，たとえ作り上げてもそれは似非共産主義になるにちがいないと考えました。この論争を今日からみてみますと，正しかったのは呉稚暉であり，間違っていたのは陳独秀だということははっきりしています。

さきに台湾の要人であった[郝]柏村は，海峡両岸の問題を解決するには，まず互いの敵意を取りのぞかねばならない，と言いました。国共間の敵意は歴史のなかで形成されてきたものであり，敵意を取りのぞくには，まずあらためて中国の現代史を研究し，政治闘争による歴史の歪曲を正し，本来の面目どおりに歴史上の国共間の矛盾を正しく理解せねばなりません。今，台湾で政権を執っているのは民進党ですから，問題がすこし複雑にな

るのは当然ですが，歴史上の国共間の矛盾を正確に叙述し，その意味を明らかにすることは，長期にわたって蓄積された誤解，隔絶，および敵意を解消し，海峡両岸の人民と政党の間の親交を深めることができ，それによって海峡両岸の合作と統一を促進することができます。

三，世界が中国を理解し，国際的な合作と交流を強化する一助となります。中国は，古い文明をほこる国であり，世界一の人口をもつ大国です。改革・開放政策の開始以来，中国は世界各国との関係を日ごとに強め，世界政治のなかにおける役割を増大させてきました。中国は世界を理解する必要があり，世界も中国を理解する必要があります。中国の現代史を研究することは，中国の昨日と今日とを理解することであり，世界と中国との間の合作と交流にとって大いに有益です。日本からみると，中日両国は隣国です。日本と中国は文化の方面で長期にわたる深くまた密接な関係をもっています。近代になってから，日本は中国にたいし侵略戦争を起こしましたが，中華人民共和国成立後，中日両国間には平和かつ友好的な隣国関係が築きあげられ，経済と文化の交流は日増しに盛んとなり，中国は日本のもっとも重要な貿易相手国の一つになっているのは，我々の大いに喜びとするところです。中国の現代史を研究するのは，日本の人民が中国を理解するのに役立ち，日本政府が両国に関わる歴史の経験を総括し，永遠に中国との善隣関係を維持し，世代をこえた友好と真の「共存共栄」，そして近代以来多くの中日の人士が追い求めてきた「兄弟の国」「唇歯輔車」の国となるのに役立ちます。

外国人が中国の現代史を研究するには，不利な条件とともに有利な条件もあります。不利な条件は，言語，文化上の障碍です。有利な条件の一つは，何を言っても自由であり，気遣いが不要であることです。中国の現代史には多くの「地雷原」があり，中国の学者は，研究をするさいに小心翼々として地雷を踏まぬようにせねばなりません。外国の学者にはその心配はありません。有利な条件の二つ目は，利害を超越して，客観的な態度をたもてることです。俗に，当事者は迷い，傍観者はよく目が利くと言うではありませんか。歴史学はつよく真実を求めます。歴史研究者は個人の主観をできる限り排除し，利害関係の外に超越せねばなりません。この点では，外国の学者はおのずと優越した立場にあります。有利な条件の三つめは，思考が独特であり，観点が独特であることです。世界上の各民族はそれぞれ独特の文化的素質をもっています。このため，それぞれの学者の思考方法と研究方法にも，つねにその特徴があらわれます。今年２月，私はアメリカのスタンフォード大学を訪れました。著名な中国思想史の専門家 Metzger 氏が私に言いました。「あなた方が提唱しているのは君子の道徳であり，我々アメリカ人が提唱しているのは小人の道徳だ」と。この話は，たいへん鮮やかに中国とアメリカの歴史と文化の重要な差異をつかんでいると思います。孔子から毛沢東まで，中国はつねに人が聖人，賢人になることを求めてきました。毛沢東は「六億の中国人はみな堯舜である」と言い，すべての人が「私を破り公を立て」「大公無私」「私と闘い修正主義をやっつける」ことを要求しました。しかしアメリカ人は人に法を守る市民であることを要求し，いわゆる「個人主義」に反対したこ

とは一度もありません。しばらく前のことですが，京都大学人文科学研究所では梁啓超の共同研究をおこない，その研究成果は，日本の明治維新と明治文化が中国の維新運動と啓蒙運動に深い影響を与えていたことを証明しました。現在おこなわれている「中国近代化の動態構造」研究班は，様々な角度と分野から中国の近代化の問題を研究しており，それが，中国の近代化の事業にとって有益な知識と経験を提供するであろうことは間違いありません。ですから，外国人が中国の現代史を研究すれば，高度な地点に到達し，独特のすぐれた貢献をなすことができ，それによって歴史科学の宝庫をおおいに豊かにすることができると，私は思います。

中国に古い言葉があります。「海は闊びろとして魚の躍するにまかせ，天は高くて鳥が飛ぶのにまかせる」。中国の現代史は豁然とした空間であり，それを研究することは，おおいに必要であるのみならず，おおいに有望です。京都大学は著名な京都学派発祥の地であり，中国の歴史と文化について，中国現代史の研究もふくめて，これまで優れた成果をあげてこられ，世界的に知られております。この伝統が21世紀においてさらに輝かしく発揚されることを希望します。京都大学が，中国の歴史，文化と中国現代史の研究においてさらに大きな成果をあげ，いっそう大きな働きをされますよう祈念いたします。

これをもって話を終わらせていただきます。皆様，ありがとうございました。

コ　メ　ン　ト

京都大学名誉教授　狭間直樹

司会　どうも楊先生，ありがとうございました。

それでは，名誉教授の狭間直樹先生からコメントをいただきます。よろしくお願いします。

狭間　今，楊先生がお話いただきました件，岩井先生から丁寧な通訳をしていただきましたし時間も迫っておりますから，できるだけ簡単に申し上げたいと思います。

中国が大変に歴史を尊重する国であるということはお話にもございましたし，実際，ここにおられる方はだれしもがご存じのことだと思います。章炳麟という清末，近代の有名な思想家は，「自分たちが今あるというのは，要するに歴史の結果なのである。歴史を無視して今の我々はない」ということを絶えず強調して，その立場から発言し，議論を組み立ててきました。

今日のお話は，現代史の研究，それも中国の現代史ということで，３つの意義を特に強調されたわけです。１つは，中国の国情というものを認識するというという点では，まず現代史というものを理解する必要がある。そして第２に，現在，中国が政治的に一番大きな問題として直面しておるはずの台湾との統一問題，やはりこの問題がかかえる矛盾の認

識は現代史そのものである，ということであります。第３に，そういう中国が世界と結びつき交流していく上で，中国の現代というものを自分たちが知る，また世界に知ってもらうということ，これを抜きにしては，今の我々はない。従って，現代史というものの研究の意義というのは，語るまでもないことながらということで，いくつか具体的な例を踏まえながらお話を展開していただきました。

ですから，中国が大きな国であり，歴史が古く，そしてまた現代に占める地位が特別に大きなものであるということから，あるいは，日本の隣国であるということからも，今のお話にかかわって議論すべきこと，あるいは窺がいたいことはたくさんございますが，しかしそれを言っているひまはございません。二つのことだけを申し上げます。

一つの問題は，簡単に言いますと，現在の歴史研究がいわゆる国民国家というものを基礎に置いて行われている，ということに在ります。法律をはじめ，すべてがそういう体系に組まれているということは確かであります。しかし同時に，それらの国々が世界というものの中にあることも確かであって，ということは，少なくとも近代において，歴史研究も，あるいはほかの思想もすべて，国民主義と世界主義というものの間を揺れ動いている。国民主義が主であると思いますが，そういう両極間の動揺関係のなかにあった。

そしてそれは，例えば今日お話に出ましたような中国の思想家，政治家で言いますと，梁啓超と孫文は，ちょうどお互いが裏返しの関係で，10年おきぐらいに，片一方は世界主義で片一方は国民主義というような関係であったということが言えると思います。その説明は少し話が複雑になりますからここでは省きますが，要するに，すべての人々の認識というものは，自分の置かれている時代において揺れ動きつつ，歴史そのものの流れが形成されてきた。そして，我々はその後の時代に在って，今現在の立場に立って違う角度から，その研究をしているわけです。このことは，これだけにします。

もう一つの問題は，時間的な前後というか，よく言われる伝統と現代ということから，後で先生のほうが時間があれば補足していただきたいと思うことを，具体的に申し上げたいと思います。

中国にとって，古典，とりわけ儒学の経典というものは大切なものでありますが，その中でとりわけ近世以降重視されるのは，四書の一つの『大学』であります。『大学』の中の，とりわけ八条目というもの。格物・致知・誠意・正心・修身・斉家・治国・平天下。修身がいちばん我々にとっても身近な言葉でありますけれども，その八条目は，時代によって機能の仕方は違ったとしても，中国の歴史を通じて一つの倫理コードとして働いてきた。そして，それを最後にというか，一番新しい時代にたいへん強調したのは，今も話に出ました孫文でした。

孫文によれば，『大学』の八条目というのは，中国が世界に誇れる最高の政治哲学であります。それは，孫文の言ったことでありますが，日本でもそういうことを全然違う角度から主張されたのは，島田虔次先生によれば，孫文ほど有名ではありませんけども，京都大学の倫理学の森口美都男先生です。森口先生は，全体主義の問題ということを考える時

に，もし庶民一人一人がこの『大学』の八条目というふうな精神を確立していたら，そしたらおよそ精神的な危機というか，思想的頽廃ということからは免れられたはずだとおっしゃっています。

つまり，そこで言われていることへの高い評価は，孫文は政治哲学の角度からおこない，森口先生は倫理学の角度から，倫理学者として一人一人の心の持ち方の問題として発言されました。しかし，究極するところは同じことであって，結局，歴史の担い手，それは個々の人間でありますから，恐らく今後，中国史研究，あるいは歴史研究そのものが，いわゆる大きな流れとしての歴史と，一人一人の人間の心の歴史というものをつないでいく，その方向に新しい時代は行くであろうと思います。

かつて我々が学生のころは，歴史は一元論がいいのだと思って，プレハーノフやクローチェなどを一生懸命読みましたが，現在ではご存じのように，文化多元主義的な考え方が主流かと思います。文化多元主義がすべてであるとは思いませんが，多元主義に立つことによって，いろいろな今まで見捨てられたというか，なおざりにされたものが拾い上げられることは確かであります。

そしてそれは，恐らく歴史の大きな流れと個々の人間の心とのつながりというところへ行かねばならないはずであって，それは恐らく中国の場合，2000年前から確立されていたと孫文も言い，日本の倫理学者もきわめて重視する世界に誇るべき政治哲学，そういうふうな古代につくり上げられた文化遺産，精神遺産と現代とのつながりというものを問題にしなければならないと思います。

中国の現代史研究において，その問題がどの程度強く取り上げられようとしているかということについて，いくらか後でお話をいただけたらということを申し上げて，私のコメントを終わりたいと思います。以上です。（拍手）

司会　どうもありがとうございました。

古典文献と漢字情報学

国際情報化協力センター国際情報化研究所主任研究員　佐藤敬幸

司会　それでは，殿軍を佐藤敬幸先生にお願いいたします。本日は，「古典文献と漢字情報学」というテーマでお話しいただきます。

先生は，まだコンピューターが一般に普及していなかった1970年代から，日本とアジアにおける情報技術の国際化ということを推進してこられました。特に1989年以降は，国際規格の中に漢字コードを反映させることに尽力されまして，現在も規格制定のための国際委員会で日本代表を務めてくださっています。

本日も，外国から帰ってこられて，また出かけられる，わずかの間の一日を利用してお話いただきます。どうぞよろしくお願いいたします。

佐藤　佐藤です。今日は，幸いというか不幸というか，長尾先生がいらっしゃらないので，ほどほどにコンピューターの話ができるんじゃなかろうかなあと思っております。

今日お話させていただくのは，大変重々しい題名ですが，したいことはこういうことです。まず，80年代の後半から，早く言うとパソコンがかなり普及し始め，安くなってきたころから，コンピューターの中の文字をどう取り扱うかということについての考え方が，急速に変化しております。変化なんでしょうけども，これを一応進歩と前向きに話しておきたいと思います。

これは実は，欧米系の文字，アルファベットを中心に考えたときに，なんで進化しなきゃいけないのかと言うと，コンピューターの使い方がだんだん高度化して，いろんなものに使われるようになったからだと，こういうことです。ですから，これはまだまだこれから使われていくはずですので，きっとまだまだ変わっていくでしょう。というのが１つの話です。

このように変わっていってるんですが，実は，漢字，それからタイ系の文字，あるいはサンスクリット系の文字，これらのアジアの文字の要求が，果たしてこのモデルで対応できるのか。ニーズが高度化するわけですから，変わっていかなきゃいけないわけですけれども，欧米系の文字を中心に，アルファベットを中心に変わっていくモデルが，果たしてアジアの文字にも適用できるだろうかと。どうも適用できそうにもない。とすると，そ

の乖離が大きくなると，だんだんまたコンピューターが使いにくくなるという事態になりますので，漢字，あるいはほかのアジアの文字についても，非常に今原始的なところでとどまっておりますけれども，モデルを進化させて位置づける必要があるのではないか。そのためには，かなり学際的な研究を常にし続ける必要があるんじゃなかろうかというような話を，今日はさせていただきたいと思います。

と言っておいて，一番最初にクイズみたいなことをします。a と *a* は両方ともアルファベットの a の文字です。両方とも皆さんお使いになってると思いますけれども，果たしてこれは同じ文字でしょうか。同じ形でしょうか。こういうことが，実は議論の対象になっているということで，これは最後に，今どういうふうに考えられてるかということを答えとして出したいと思っています。

さて，じゃあ，今問題視しているアルファベットの世界の文字モデル，これはどういうふうに変わってきたかということに，ちょっと触れてみたいと思います。これを出すと，何の変哲もない文字なんですが。

要は，昔から言えば，文字というのは，書けて，見えて，どこかに記録されているものというのが文字であったと思います。これを情報処理機器の上で不幸にしていろんなことをして扱わなきゃいけない。紙だとか，石だとか，そういうものに彫りつけて読めればいいという時代から，なまじ機械などを使うようになったものだから，かなりいろんなことが起きてきた。

そういう意味では，文字を字の形のままで伝えるということをしない機械として最初に出てきたのは，電報だろうと思います。これは，だれかが書いた手書きのものを，電報コードに直して，それで送ってやって，それを長音と短音で聞き取ったものを，だれかが聞き分けて手で書いて相手に渡すというようなことがされていたんですね。ですから，２回手書きをされて，どういう形になったかということは，まったく意に介さない。要は，ある種の情報が伝わればいい。これで十分満足できる世界が，1800年代後半にはあったわけです。ついこの間まで，そういうことが行われていたわけです。

驚くべきことに，アルファベットの電報でも，大文字，小文字の区別はありません。それでもちゃんと情報交換できて，話ができた。通じてたわけですから，まあ，それ以上高度化する必要はないじゃないかと，そういうことを考える人もいなかったわけではなくて，60年代，ついこの間まで，そういうコンピューターもたくさん売られておりました。

とはいえ，印刷の世界では，もう印刷そのものが考えられた時から，書体という考え方，あるいは文字のスタイルという考え方が出てきておりましたから，どうしても文字のスタイル，形の違う文字でも同じ文字だという概念は当然出てくるんですね。それがコンピューターの世界で導入されたのが，たぶん80年代後半から90年代の初めごろ。一般的になったのは，初めごろだと思います。ちなみに，パソコンやなんかがちょっと売れ始めた90年代初めごろは，プリンターにもパソコンにもほかの機械にも，すべてそれぞれフォントが入ってるという時代でしたから，要は，どこでどういうふうに出るかは意に介さないと，

こういう時代だったと思いますけれども，その後，一応フォントを指定してできるということになりまして，やっと文字と形とが若干分離してきた。従って，見える文字は活字箱に入っていて，活字箱の所定の位置，論理的にどの字が入ってるかという場所が文字だというような概念になってきております。

従って，見える文字とキャラクターの概念が若干変わってきています。分離します。こっち（キャラクター）はロジカルな字。この間に「書体」という概念が入ってきた。今，ほとんど皆さん，これで動いてると思いますが，実際問題として，例えば一番先に起きた問題が，ロシアのキリル文字と英語と混ぜて使おうと思った。そうしたら，キリル文字にもＡと同じ形の文字があります。果たしてこれはＡなのだろうか，それともキリル文字のＡなのだろうか，こういう疑問が起きてきた。

さらに，アラビア文字に入りますと，アラビア文字というのは，同じ音のための文字が４種類あって，１つの単語の頭に来るか，後ろに来るか，真ん中に来るか，独立かで形が違う。それぞれ違う文字なのか，同じ文字なのかというような議論がありまして，これは困ったと。これは同じ文字だけど，抽象的な形がアラビア語の場合は４種類ある。というので，今度は，見える文字と，いわゆる論理的な文字との間に，「グリフ」という抽象的な「形」という概念を挟み込んだ。これでやっともう少し複雑になってきた。この概念が割に使われ出したのは，90年代の中頃ですね。

こうしてるうちに，つい最近になって，インターネットの連中が困ったことが起きたと。

各国語でドメインネームを決めたい，自分の名前を自分の文字で書きたいということになったとたんに，ラテン系の文字なんかはそうなんですけども，アクセント付きの文字，例えばäという字を想定してください。äという１文字でやるのか，aと¨（ウムラウト）と２文字で表現するのかという問題が起きてきました。どっちでもいいじゃないか，そう見えればというのは，見える文字の世界でして，データとして，aが来て¨が来るのか，¨が来てaが来るのか，äなのか，これはデータとして３種類あるわけです。全部同じに見えるんですが，３種類。

ドメインネーム，あるいはｅメールアドレスが，そのどれかの１つでなければ，その人はいませんよと。せっかく送ったやつが届かないということになります。例えば日本語の例で言いますと，半角カタカナで書くか，全角で書くかというような問題ですけども。馬場さんという人がいたとします。この人にインターネットでメールを送る時に，「ババ」と２文字なのか，「ﾊﾞﾊﾞ」の４文字で送らなきゃいけないのか，あるいはこの人は非常に凝った人で，前の字は「バ」で，その次は「ハ」で「ﾞ」だとかいうふうに名前が登録してあったとすれば，その人にメールを送る人はすごい大変だということで，この際，全部ばらしたものを１つの記号にしようというふうに考えまして，さらにここにグリフがあって，もう１つ階層をコンバイニング・シーケンシーズという概念を採り入れまして，ここにキャラクター。こういうふうにだんだん概念が階層化されていく（図１）。

これでも最近は問題になってまして，やっぱり言語は何だということを言わなきゃいけ

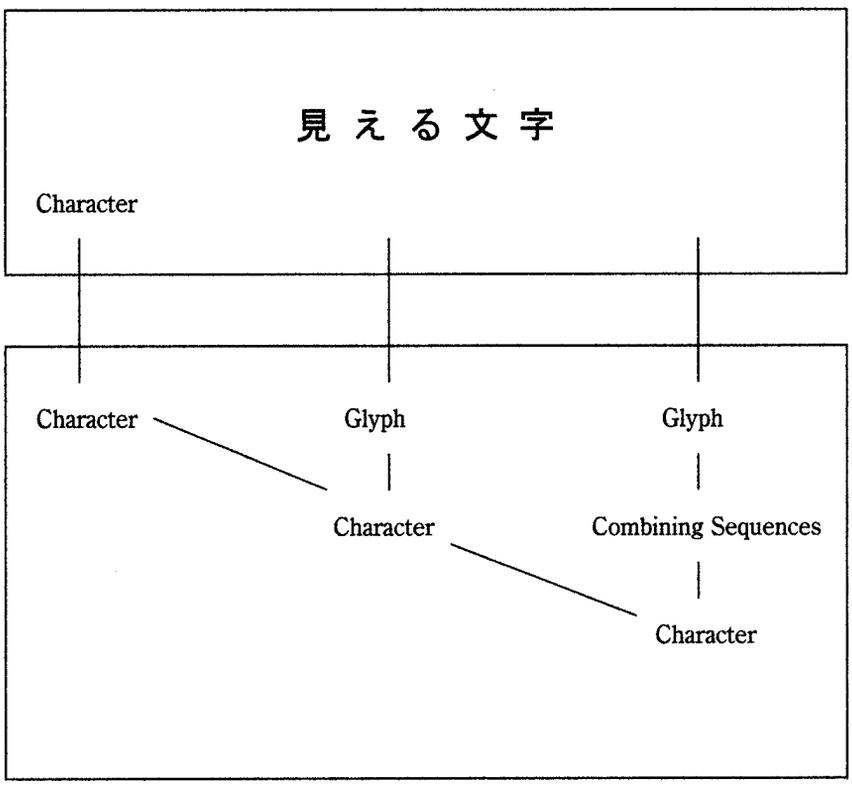

図1

ないんじゃなかろうかという議論もされています。このように，ずっとモデルが変わってきております。

これが問題でして，文字を使う方から見れば，常に文字はこの「見える文字」の位置にあるわけです。こういうものにもかかわらず，コンピューター屋だけが，文字概念をどんどんどんどん皆さんの常識からはずれたものにつくり上げていってる。で，「文字はこれだ」って言うもんですから，だんだんコンピューター屋の話はよくわからないという状況が起きつつあります。

これである程度ラテン系の文字は片づくわけですけれども，ラテン系というか，表音文字系の文字は大分片づいて，まだまだ異論はありますけど，片づいてきてるわけです。じゃあ，漢字はどうなんだという話になりますと，まず，このモデルでどんどんつくられて製品が出てきた場合に，これをそのまま適用できるだろうか，どうでしょうかと。あるいは，我々のアプリケーションの進歩が，このモデルで追随できるでしょうかということになると，甚だ怪しいということになります。

じゃあ，漢字は今どういうふうになってるか。また最初から考えてみましょう。漢字が機械化されたのは，さっきと同じように，印刷技術が中国で始められたとか何とかいろいろあったとしても，やはり電報です。漢字の電報というのは，皆さん，あまりなじみがないかもしれませんけども，中国にはありまして，手で書いたものをだれかが４桁のコードに直して，それを受け取った人が手で書いて受取人に渡すというようなことが，ずっと昔

から行われてまして，これが情報交換に使われていた。大げさに言うと。

ちなみに，辛亥革命の時なんかは，政敵同士がこれで延々と理論闘争をやり合ってるということは，つまり，４桁の１万字程度でかなり複雑な意思交換をしていたということになりますね。ですから，漢字は１万字あればいいんじゃないのと，こういう言い方もできるんです。

この時はどういうことが起きてたのかと言うと，手で書いた文字をだれかが見て，暗号に直して，暗号をモールス信号で送って，受け取ったほうがそれを聞いて手で書くわけですから，相手にどう伝わるかはわからない。受け取った人が略字で書くかもしれないし，正字で書くかもしれないし，どこか間違って書くかもしれない。これでよくああいう革命が起こったという複雑な話ができたなあということで，実はどなたかが，あの時どういう情報が交換されて，どういう情報はちゃんと通って，どういう誤解が生じたかという研究をしていただければありがたいなあと。そうすると，１万字ぐらいで何ができるかということが意外にわかるのではなかろうかと，個人的には思っています。

余談はさて置いて，じゃあ，どういうモデルの必要があるのかということになりますと，皆さん，どういうふうにコンピューターをお使いになりたいかという質問になります。

実は，日本には JIS の X 0208 という7,000字ばかりの漢字を選んだセットが1978年に出されて，それでできた機械が皆さんのところにある。大部分の方はそれをお使いになってると思います。最初は，非常にうれしく皆さんに使っていただいた。ちょうどこの時代ですね。その後，常に我々は，漢字が足りない，コンピューター屋は何をしてるんだというような声に当面しておりまして，それが事実だというふうに考えております。少なくとも今，ストレートに申しますと，日本のコンピューターの漢字に対する発想は，先ほどラテン系の文字は大体ここを通りすぎてこのへんでうろちょろしてるよと言いましたけど，漢字はこのへん（見える文字とキャラクターの間，図１参照）で往復しています。まだ非常に原始的な状況です。

どういうことかと言いますと，ある団体に今の JIS に足りない漢字表というのを出していただきました。それを見ると，本当にない字というのは，１％～３％ぐらい。絶対ないという字は。残りは，この漢字の字は３画のくさかんむりを使ってるけど，私は４画のを使いたいとか，何となくこのはねが気に入らないとか，そういう話なわけです。そういうはねが気に入らないとか，３画とか４画という要求は，実は書体がちゃんと決まって，相手に出てくるものを非常に正確に言わなきゃいけないという場合ですね。

ですから，電報の時に相手がどう書くかということを意図しないでつくったわけですから，大体電報の発想でつくっている。実際，最初の漢字をつくった時の議事録を見ますと，漢字テレタイプをどう標準化するかというような発想に立ってますので，大体そんなところで落ち着いてたものを，もう少しちゃんとやろうというのは，最初から間違っている。そういう形で，今，特に古典文献なんかをやっておられる方には，まったく不十分な機械が供給されている。

じゃあ，その方はどういう字を要求されてるか，あるいはこのへんの議論はどういうことがやられてるかということを多少ご紹介しますと，あるところでは，「芦」と「芦」と「芦」，これは違う字だから，一緒にされては困ると言ってる。しかし，JISでは１つではないかというような議論ですね。先ほど確か小南先生が，けったいな版本を拾ってくるなと言われたというようなお話をされてましたけれども，実際この世界では，「けったいな異体字を拾ってくるな」という一派と，「いやいや，それがいる」という一派とが，日夜凌ぎを削っているというのが実態でございます。

ちなみに，くさかんむりの下の部分の文字に関して言えば，中国大陸のほうでは，我々は「户」の字を使いたいと。日本は「戸」でいいと言う。韓国は「戶」でいい。でも，台湾は，「戶」も「戸」も「户」もいると言っちゃったんで，しょうがない，全部違う字ですねっていうような処理が目下されている。

これは，先ほどの話の中で言うと，この中でどのぐらいの小さな違いを無視するかという議論ですが，目下のところの議論の焦点は，小さな違いはこのぐらいで無視するのが実用的であるらしいという議論を安岡先生なんかが大分やられて，このへんでおさまってるわけなんです。

次の課題は，今まで，ちょっとはねがあるとか，３画・４画のくさかんむりは同じように読もうとかという程度の話をしていたんですが，ここに例がありますけど，それは時間の関係で端折りまして，小さい違い，小さい違いと言うけど，実際には大きな違いがあるんじゃないかと。「經」は，経済の「経」という字の翻刻文字ですね。「步」は，「歩」という字の翻刻文字です。小さい違いだけで議論してると，確かにこの範囲は同じだと思うと言うと，これは理論的には違う字になりますけれども，さあ，こういうものは同じと言っていいんでしょうか。形の論理から言うと，違う字と言わざるを得ないんですが，それで本当にいいんでしょうかということになると，かなり疑問になってくる。じゃあ，これは同じ字だと言うと，皆さん，かなり異論があると思います。じゃあ，これは違う字だって言うと，この字，何ていう字っていう問題が必ず起きてくる。

ということで，これをどう片づけようかと。こういうニーズがあるということを認める。「こういうけったいな字なんか拾ってくるな」と言えば，これでおしまいなんですけども，「これはいるんだ」と言うと，かなり問題になってきます。

じゃあ，こういうものは，先ほど言ったモデル（図１）に当てはまるか。ちょうど今必要なニーズがここにある。これから議論しなきゃいけないことがここにあるとしますと，同じ文字についていろんな形があるといったこのモデルが当てはまるかどうかというのは，疑問のポイントになりますね。もう一段，モデルの上へ積んだらどうか。

実は，このモデルが適用できるのは，正書法でちゃんとどの形を選ぶということが決まってる場合の形のバリエーション。従って，もっと正しく言うと，データをずっと見ていくと，どの形を選べばいいかということもちゃんとわかる。同じ文字にいろんな形があるんだけれども，この場合はこの形。先ほどアラビア文字で言ったように，スペルの一番前

14　15　16　17　18　19　20

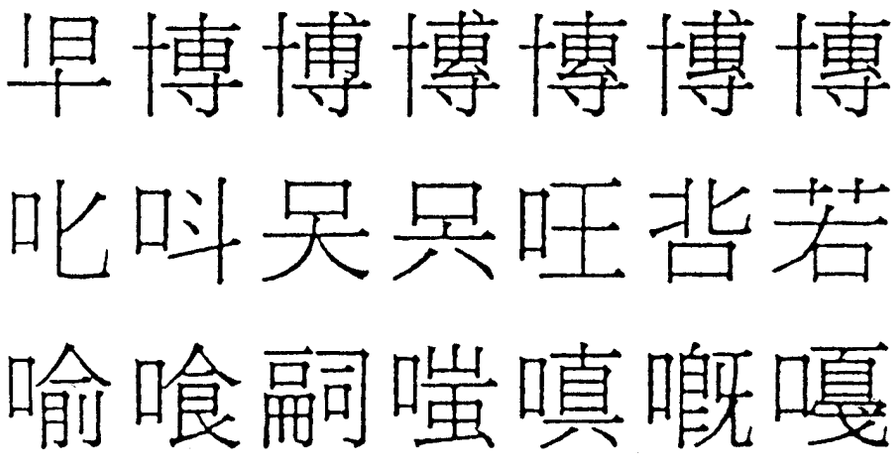

図2

に来たら４つのうちのどれを選ぶ，後ろに来たらどれを選ぶんだということがはっきり決まっているという場合に，抽象的な形としてこれを選ぶのであって，任意に選んでいいという条件ではない。

すると，先ほどのやつをグリフ・バリエーションだと言ってしまうと，さあ，どれを選びますかということが自動的にできない，矛盾なくできないことになるということで，実はもう次の段階，あるいは我々が欲しいこういう（「歩」や「経」の）バリエーションですね，これは細かいバリエーションも同じことです，こういうバリエーションを使い分けたいと言ったとたんに，もうすでに今のモデルは使えなくなるということです。

これは，例えば，（図２の）こういう違いを使い分けたいという時も，データを見ただけでどの字を使えばいいかということはまったく決定できませんから，先ほどのグリフ・モデルというのは今は通用しない。ただ１つ通用するのは，こういうケースです。

たまたま中国，台湾，日本，韓国，香港が，この字（草かんむりの下に遍）について使い分けたいという時に，各国が唯一これしか使いたくないともし言ったならば，どこの国の文書ということでは使い分けできるかもしれませんけれども，実際にはそういうことはできない。すると，すでにこのモデルが破綻をしている。漢字については破綻してしまっているということになります。

そうすると，アルファベットモデルのこの次を探してる。この次の問題があるということ。これは自明だ，もう動かせないということになると，３年後か４年後にいいアイデアが浮かんだ，漢字はこうやるということを言っても，もうモデルとしてはこれは融合できなくなるということで，ここまで乖離すると，かなり急いで漢字モデルというのを提案して，これをもう少し変えて両方成立するような形にしていかないと，もう一度コンピューターが使いにくいという時代が来ないとも限らないということになります。

さて，それじゃそれをどうやってやったらいいんだろうかと言いますと，実はこのモデルは，文字学的に言語学的にこうなんだ，これは正しいんだからやれと，こういうモデルではまったくありません。実際問題としては，単細胞的な，ひたすら言うことを大急ぎで処理できるコンピューターという機械が，人間がこちらの見える文字をああやりたい，こうやりたいと言うもんだから，コンピューターの中でこう考えたらあれにも対応できるよという，コンピューター用の内部のモデルであって，文字学をいくら勉強しても，これの解答は出てきません。

逆に，これを考える人たちは，ニーズがわからないと，何をどうしたらいいかわからない。早く言うと，漢字はこうやりたいというニーズがない限り，表には出てこれない。逆に，こういうふうに漢字を扱いたいという人は，一般には文字学に凝り固まって，あるいは文字そのものに凝り固まっているので，こんないいかげんな機械に合わせた分解の仕方というのはなかなか考えつかないということで，実はそれが原因で，漢字のほうはなかなか前に進まないという状態になっております。

ということで，これをブレイクスルーするためには，どうしても両方にまたがった学際的なアプローチが必要なんじゃなかろうかということで，目下いろんな人を集めて，情報処理学会のほうでどうすればいいかということを議論中であるということです。

たまたま今は，翻刻字なんかを中心とした異体字がこの次，大問題であろうということまでは見えてますけれども，その先，また何か出てくるに違いない。ということになりますと，この手の研究は，ニーズの発展に対していろいろやらなきゃいけないわけなんで，ほとんど永遠にこんなんなんだ，こんなんなんだということで，こういう学際研究を続けていかなきゃいけないんではなかろうかというのが，これから継続すべきであると私が考えているポイントです。

というところまで行きますと，先ほど出したクイズの答えを出さないと，皆さん，今晩寝られなくなる可能性が高いので言いますと，先ほどのモデルで言いますと，*a* も a も同じスクリプトなら同じ字です。でも，*a* がキリル文字で，a がラテンアルファベットなら，違うものです。ですから，同じでもあるし，違ってもいます。それから，a が先ほどのモデルでグリフだと見ますと，抽象的な形という意味では同じ形です。しかし，印刷した結果の字としては，ご覧のとおり違う形です。ですから，答えは，同じ字であり違う字である。同じ形であり違う形ですというのが解答です。どうもありがとうございました。（拍手）

コ　メ　ン　ト

人文科学研究所助教授　安岡孝一

司会　どうもありがとうございました。

それでは，研究所の安岡助教授のほうからコメントをお願いします。

安岡　ただいま国際情報化協力センターの佐藤先生に，現在，漢字というものをコンピューターで扱うという時にはどういうところに問題が起こっているかということを，かいつまんでお話いただきました。

それで，やはり漢字を扱うといった時に何が問題になっているかという点で，漢字とは何であるかということが実は研究者としてはよくわかっていないというところが，この問題の底にあるのではないかと思います。もちろん東方学の分野では，漢字というのはあって当然で，スタートからあって，見たら読めるもんだというふうにしてやってきたんですが，情報学屋のほうから見ますと，なんでその字，そう読めるねんというところから始めなければいけなかったのを，皆様，東方学の方は知識があるもんですから，そんなことはすっとばして行ってしまっていた。漢字そのもの，１つ１つの情報というのは，どうやってあらわされていて，本来全体としてはどういう構造を持っているかということを，ほとんど考えずにやってきてしまったというか，そんなことは常識の範囲として処理されてきたわけですね。

ところが，近代に至って，特に学生の方はわかると思うんですが，そういうことがあまり常識ではないという時代になってきた時に，じゃあその字をどうやって扱うのか。というのは，実際の生活の上で漢字をどうやって扱うのかと同じことで，その扱い方というのが本当にはっきりとわかってるならば，コンピューターの上でも扱えるはずだというのが，最近考えられていることであります。

と能書きを垂れても，なかなかうまく行きませんで，実際には「えい，やっ」と使い方を今後考えていく。あるいは，どうすれば漢字を問題なく扱えるか。表示できればいいというだけではなくて，こういうふうに扱いたいと。こういうふうに扱いたいんだから，こういう処理をすべきだと。こういう処理をすべきだから，実際の情報の構造はこうなっているべきだと。というあたりを，もう少し突っ込んで研究する研究者が，本来は必要なのではないかというのが，私の考えとしてはございます。

多少時間が押しておりますので，端折ってこれだけにさせていただきます。

司会　どうもありがとうございました。

ま と め

人文科学研究所東方学研究部主任　森　時彦

森　本来ですと，この後，皆様方からいろいろご意見を頂戴する時間を設けようと思っていたんですけれども，フロンティアでご活躍の先生方，それぞれ皆さん，あまりにも豊富なお話をお持ちでして，今回は，先生方のお話をうかがうだけで時間がなくなってしまいました。

すでに申し上げておりますように，この公開シンポジウムは，連続３回を予定いたしております。次回，第２回目は，人文研本館の大会議室で行いますので，この会場のように厳しい時間的な制約はございません。ですから，次回はたっぷり時間を取りまして，今日のお話も含めて討論の機会を設けたいと思います。

さて本日は，４人の先生方から，それぞれ最前線でご活躍の興味深いお話，そしてその立場からする貴重なご提言をいただきました。東方学とは何か，そして欧米人にとっての東方学と日本人にとっての東方学とはどのように違うのかなどといった，そういう根本的な問題提起から始まりまして，歴史研究にフィールドワークを取り込むことの意義とそれにともなうさまざまな問題点のご指摘，そして現代中国を研究することにどういう意義があるのか，とりわけ日本人が学ぶことにどういう意義があるのかについてのご高説，そして最後に，漢字というものをコンピューターで扱うに際しての問題点，一言で言えば学際的なアプローチによって初めて大きな問題を解決できるとのご指摘に至るまで，非常に重要なお話を拝聴しました。

いずれのお話をうかがいましても，21世紀の東方学というのは，国際化の問題を避けて通ることはできない，ということをひしひしと感じました。グローバリズムという言葉も出てまいりましたが，ともあれ国際化というものを抜きにして21世紀の東方学は語れないという方向が見えてきたように思われます。そこで第２回目のシンポジウムでは，「東方学と国際化」というテーマを掲げまして，またそれぞれ第一線でご活躍の４人の先生からお話をうかがい，この方面の問題を討論する予定です。

さらに，そういった21世紀の東方学の進むべき方向が見えてきました段階において，では今後我々は，研究体制の上でも教育体制の上でも，どういうふうにそれにふさわしい体制を築いていくのかということを，最後に考えてみる必要が出てくるものと思われます。第３回目のシンポジウムでは，「東方学の再構築」というテーマを設定しまして，研究・教育の体制をどう新しい時代の東方学に向けて構築していくのかという問題を議論していきたいと考えております。

本日，司会の不手際で，休み時間もなしに，ずっと３時間おつき合いいただくことになりましたことをお詫びいたします。

閉　会　挨　拶

人文科学研究所所長　栗山正進

栗山　私，これほど長い間１ヵ所に座って集中的にシンポジウムにおいて皆様の深い御経験に基づくお話をうかがったことは，初めてでございます。今日は，ヴィータ先生から始めまして森先生，楊先生，そうして佐藤先生に至るまで，それぞれの御専門から非常に深い御洞察と問題の設定というものを聞かせていただきました。四先生には御多忙のなかを時間を特に割いて御協力いただきましたこと，深く御礼申し上げます。それについて我々の所員，仲間からいろいろなコメントを申し述べた次第ですが，本当に，皆様からいろいろな問題を指摘していただいて，これから１時間でも２時間でも議論をするのが，第２回，第３回に至るシンポジウムの基礎として重要だと思っておりましたんですけども，会場の都合ということで切り上げざるをえないことは，まことに残念であります。またぜひ次回も，これは年末お忙しい時になるかと思いますが，どうか御来駕を賜りまして，宜しく御協力のほどをお願いいたします。

本日は誠にありがとうございました。（拍手）